

H451

H

10



笑顔のために

平成16年7月福井豪雨災害 ボランティア活動報告書



福井県



目次

はじめに	1
福井豪雨災害の被害について	3

ボランティア活動の報告

福井県水害ボランティア本部	11
今立町水害ボランティアセンター	25
福井市水害ボランティアセンター	35
美山町水害ボランティアセンター	45
さばえ災害ボランティアセンター	55
池田町水害ボランティアセンター	65

あの時を振り返って（座談会）	73
医療ボランティア活動の実際と課題	81

参考資料（新聞記事）	86
------------	----



はじめに

福井県水害ボランティア本部 本部長 多田 喜代子

平成16年7月18日の福井豪雨災害におきましては、県内をはじめ、全国各地から暖かい義援金や救援物資をいただき、また、6万人を越えるボランティアの方々が、被災者の生活復旧支援にご尽力いただきました。厚くお礼申し上げます。

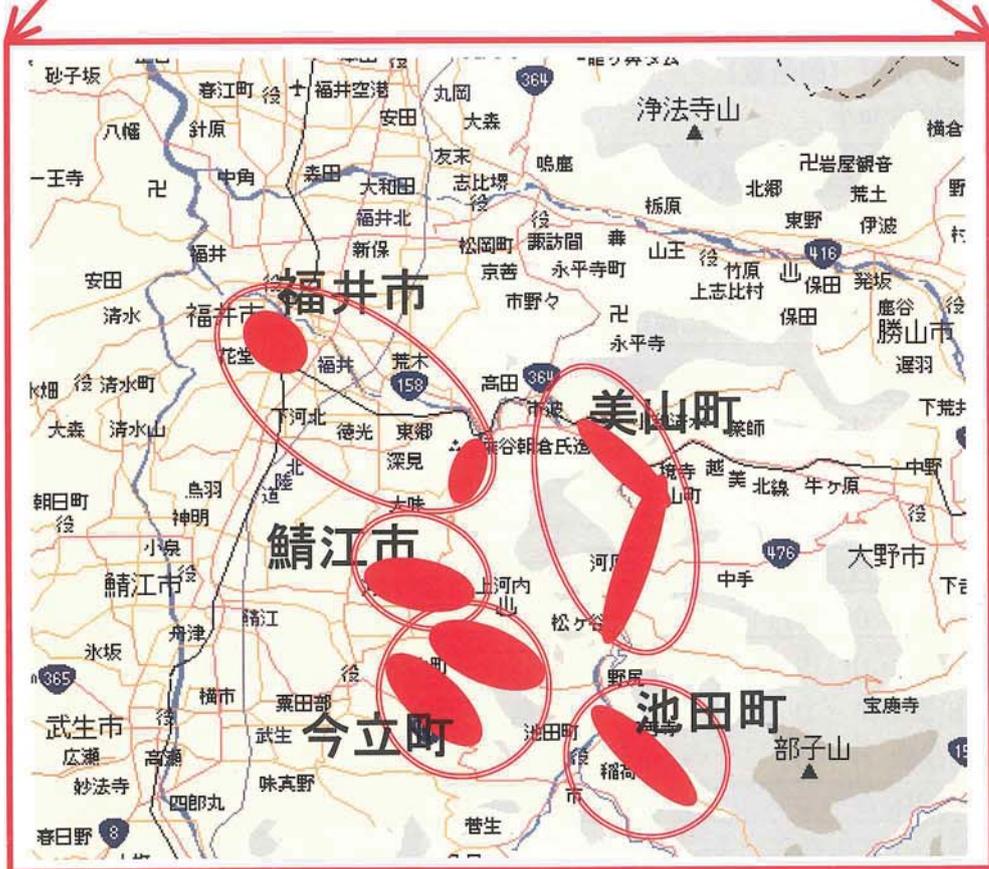
豪雨の翌日に福井県水害ボランティア本部を設置し、災害救助法の適用となった市町において、逐次水害ボランティアセンターを立ち上げ、6ヶ所でボランティアの受入を開始しました。この水害ボランティア本部は民間団体で構成する福井県災害ボランティアセンター連絡会がそのまま移行したもので、本部ならびにセンターは、官と民間とが協働し、協設・協営という形態をとっています。本部が各センターと連携を図り、人・物資の両面に亘り、一体的に支援したことによりスムーズな活動を行うことができました。被災者支援は、高齢者や障害者世帯を重点としながら、家屋や床下の泥出し、清掃等生活復旧に向けて、猛暑の中、人海作戦が行われました。

福井県水害ボランティア本部ならびに各市町水害ボランティアセンターが早期に設置できたのは、平成9年のロシアタンカー油流出事故を教訓として設置された福井県災害ボランティアセンター連絡会の機能が継続していたからと言えます。

今回の豪雨災害におけるボランティア活動において、日々、新たに直面する問題も多く、柔軟な対応が数多く求められました。そして問題点や課題が多く残されています。水害ボランティア本部ならびにボランティアセンターの活動状況が、今回の豪雨災害の教訓として、今後に活かされることを念願しながら、関係者一同が、あの暑かった19日間の活動記録と思いをこの報告書にまとめました。

この報告書から、今後のより適切な水害におけるボランティア活動のあり方や平常からの備えとして何が大事であるかを考察していただけると幸いです。

福井豪雨災害被害位置図



は被害の大きかったエリア

被害状況

7月17日夜から18日にかけて、活発な梅雨前線が北陸地方をゆっくりと南下したのに伴い、福井県は嶺北地方を中心に豪雨となった。特に、18日早朝から昼前にかけて非常に激しい雨となり、美山町では1時間に96mmの猛烈な雨が降り、総雨量は7月の月降水量の平年値(236.7mm)を上回る285mmとなった。また、福井市では18日の日降水量197.5mmを観測し、福井市、美山町、池田町、今立町、鯖江市などに大きな被害をもたらした。

1. 人的被害・住家等の被害

平成17年1月17日現在 各市町村調べ

人的被害				住家被害				
死者	行方不明	負傷者		全壊 世帯	半壊 世帯	一部破損 世帯	床上浸水 世帯	床下浸水 世帯
		重症	軽傷					
4	1	4	15	56	141	210	3,309	10,318

2. 堤防決壊等の状況 (箇所数)

18河川で被害発生

決壊	護岸破損	越水	漏水	閉塞
2	36	23	3	15

3. 道路関係 (通行止めとなった箇所数)

冠水	崩土	冠水・崩土	道路流出	法面崩壊	その他	合計
7	15	4	5	5	16	52

4. 砂防関係 (箇所数)

がけ崩れ	土石流	合計
29	91	120

5. 応急仮設住宅関係

仮設住宅建設数

地区名		建設数
美山町	蔵作地区	4
	大久保他5地区	16
福井市	浄教寺町	1
合計		21

住宅借上げ数

地区名	公共住宅借上 戸数	民間住宅借上戸 数
今立町	3	1
鯖江市	1	-
合計	4	1

6. 公共交通機関の被害

J R 越美北線（越前東郷～越前大宮）

橋梁流出 5 箇所、道床および路盤流出 19 箇所、のり面および盛土の崩壊・流出 5 箇所

7. ライフラインの最大被害

	福井市	鯖江市	美山町	池田町	今立町	大野市	計
停電	3,000	500		2,800			6,300
電話不通	50		400	150			600
断水	486	1,383	855	129	213	181	3,247

8. 災害対策本部等の設置状況及び対応等

(1) 福井県の設置状況

<7月18日>

11:20 福井県災害対策本部

<7月21日>

福井市、鯖江市、美山町、今立町、池田町に現地災害対策本部を設置

(2) 福井県の対応状況

<7月18日>

10:24 自衛隊に対し災害派遣要請

10:45 福井県知事から消防庁長官に対し緊急消防援助隊派遣要請

(3) 市町村の設置状況

福井県において、9市町で災害対策本部を設置

<7月18日>

6:00 美山町災害対策本部→ 8月31日 17:00 廃止

8:00 鯖江市災害対策本部→ 8月24日 0:00 廃止

8:00 清水町災害対策本部→ 7月19日 8:00 廃止

8:05 松岡町災害対策本部→ 7月21日 13:00 廃止

8:10 大野市災害対策本部→ 8月11日 12:00 廃止

8:30 池田町災害対策本部→ 8月31日 9:00 廃止

9:00 福井市災害対策本部→ 8月21日 0:00 廃止

9:15 今立町災害対策本部→ 8月23日 8:30 廃止

9:50 武生市災害対策本部→ 7月18日 23:00 廃止

被害写真



決壊した足羽川(県民福井提供)



福井市 濁流の中、避難する住民(福井新聞提供)



今立町市野々 土石流が集落を



美山町 消防倉庫を襲った巨大流木



濁流にのまれた今立町大滝
(今立町 石川氏提供)



福井市 流された鉄橋 (福井新聞提供)



美山町 鉄橋の土台ごと倒される



土石流で変わり果てた福井市浄教寺地区
(福井新聞提供)



池田町 流木で破壊された家屋



池田町 土石流の直撃を受けた車輛
(池田町社協提供)



福井市 ゴミで埋まる街 (福井新聞社提供)



鯖江市 冠水した街 (福井新聞提供)

嶺北に集中豪雨



集中豪雨で足羽川の水位が急激に上昇し、福井市のあまねに水が浸みこんでいる。足羽川沿いの住宅が水に浸り、一部は孤立している。避難指示が出ている地域もある。

美山降水量 1日で285ミリ

観測史上2番目



福井市は19日午後、集中豪雨で、市内の河川が氾濫し、多くの住宅が水浸しになった。また、一部の道路が冠水し、交通が寸断された。市は避難指示を出している地域もある。

福井、美山で足羽川決壊

33人死亡 2万世帯避難指示

災害救助法適用

県内の被害状況	
▽死者	3人(今立、美山、清水)
▽行方不明	3人(越前、美山)
▽避難指示	2万世帯(美山、福井)
▽建物全壊	2棟(越前、福井)
▽倒壊	1棟(越前)
▽床上浸水	福井市約1900棟、その他130棟(武生、越前、大野、美山、今立、松岡、池田)
▽床下浸水	福井市約5700棟、その他1780棟(武生、越前、大野、水原、今立、松岡、池田、宮崎)

美山地区では、足羽川の氾濫により、多くの住宅が水浸しになった。また、一部の道路が冠水し、交通が寸断された。市は避難指示を出している地域もある。

福井市では、集中豪雨で、市内の河川が氾濫し、多くの住宅が水浸しになった。また、一部の道路が冠水し、交通が寸断された。市は避難指示を出している地域もある。

福井県水害ボランティア本部

福井県水害ボランティア本部

重油災害の教訓からの備え

福井県は、1997年に起きたロシアタンカー油流出事故災害で、本格的なボランティアセンターの運営を経験しています。その時の教訓がこの豪雨災害で活かしました。あの当時、県外から支援に駆けつけていただいた様々な団体から、センターの立上げや運営ノウハウの提供を受けました。そして、地元の社会福祉協議会や青年会議所などが中心となって、ボランティアセンターを運営し、全国から集まった個人ボランティアが実働部隊となりました。その当時、災害ボランティア活動に対応できる人材がいなかった福井では、初期の段階では県外のノウハウを持った団体などからの支援が無くては、センターの運営はできませんでした。また、資金の面でもかなり苦勞をしました。活動終了後に、これらの課題点から、再び福井県内でボランティアの力を要するような災害が発生した場合、県内の人材でボランティアセンターが運営できるよう、人材（コーディネーター）の育成と、県内の民間団体ネットワークの形成が必要との認識になり、行政（福井県）から組織づくりの計画が出され実現化しました。それが現在の「福井県災害ボランティアセンター連絡会」で、1999年に誕生しました。このネットワークの目的は、「災害時において、迅速かつ的確な対策の実施に資する」と明記されています。

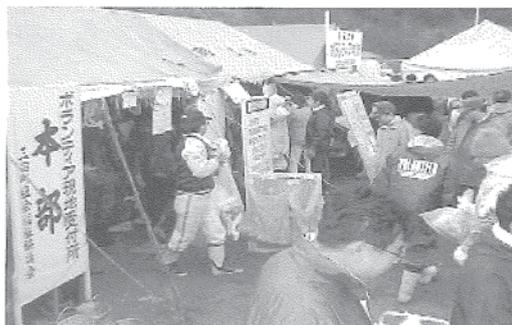
また更に、油流出事故災害時に福井県に寄せられた義援金の残額を原資にして、福井県内で発生した災害に対して活用できる「福井県災害ボランティア活動基金」が設けられ、1億2千万円の災害時ボランティア活動資金が用意されました。この基金は、寄附金や利息などを積み増しし、福井豪雨災害時には1億3千万円余りになっていました。これで、重油災害時に最も苦勞した、人材、財源に対するの備えが用意されたのです。そしてこの「福井県災害ボランティアセンター連絡会」と「福井県災害ボランティア活動基金」が、福井豪雨災害ボランティア活動の大きな原動力となりました。

福井県災害ボランティアセンター連絡会の構成団体一覧

団 体 名	
環境ふくい推進協議会	福井県生活協同組合連合会
社団法人 日本青年会議所ふくいブロック協議会	福井県壮年団連絡協議会
日本赤十字社福井県支部	福井県レクレーション協会
日本労働組合総連合会福井県支部	福井県連合青年団
福井県企業等ボランティア・社会貢献連絡会	福井県連合婦人会
福井県国際交流協会	財団法人 福井県老人クラブ連合会
福井県山岳連盟	特定非営利活動法人 ふくい災害ボランティアネット
社会福祉法人 福井県社会福祉協議会	



ロシアタンカー油流出事故災害のボランティア



油流出災害の時のボランティアセンター

福井豪雨での取り組み

発災した日の午後7時から、福井県災害ボランティアセンター連絡会の緊急会議を県庁で開催。休日でもあったことから、福井県社会福祉協議会、青年会議所福井県ブロック協議会、ふくい災害ボランティアネット、県（事務局）で、緊急に協議することとなりました。被害実態はまだ明確ではありませんでしたが、ボランティアセンターが必要になるのは明白であったため、直ちに『県水害ボランティア本部』設置を決定しました。被災地となった今立町では、既に本部員が町および町社協、地元の青年会議所に呼びかけ、ボランティアセンター開設の交渉をしていました。県水害ボランティア本部が設置されたことで、県災害ボランティア活動基金が使えるようになり、同日午後8時には今立町水害ボランティアセンター設置が決定され、場所も「今立町ふれあいセンター」に決まりました。会場準備も午前0時には終了し、翌朝、新聞が初めて福井豪雨災害を伝えた時には、今立町水害ボランティアセンター（以下「今立VC」）は活動を開始しており、とても迅速な対応でした。

水害の場合、被災者が家屋に戻り片付けを始めたところから、ボランティアニーズが発生します。一時でも早く被災者のもとへボランティアの手を届ける、これが災害復旧に大きく影響します。早く始めて早く終わる、これが一番被災者のためになるのです。一人でも多くのボランティアの力を、早急に集め、無駄にせず、効率よく、安全に、救援を求める被災者のもとへ届ける。それが私たち『県水害ボランティア本部（以下「県V本部」）』の使命でした。そのため私たちは、躊躇せず、休まず、立ち止まらず突き進みました。県域のボランティア本部を真っ先に立上げ、各被災現地のボランティアセンターの立上げや運営を、県V本部が全面的に支援しました。19日今立町、20日福井市、21日美山町と、被災地に入れた順番で現地ボランティアセンターを開設。被災地の全てをひとつの「面」で捉える取り組みでした。



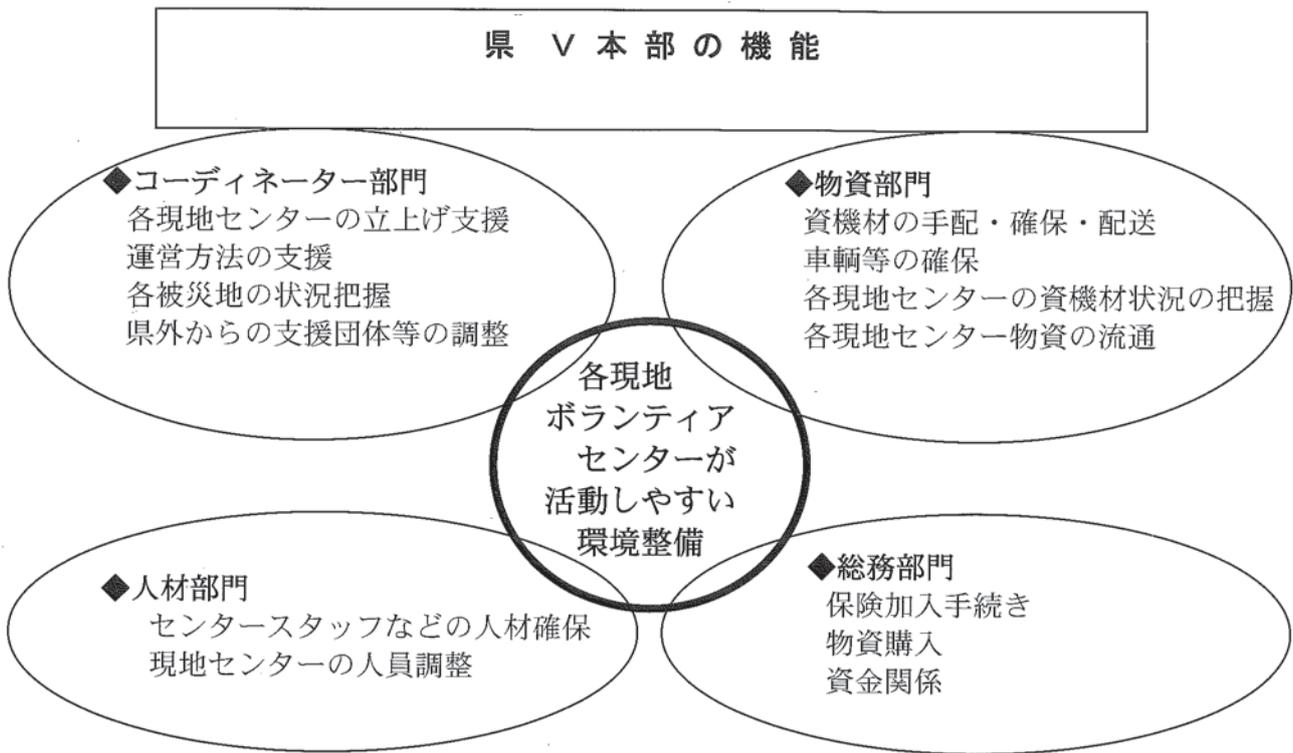
福井市水害VCの設営風景（7/19）

県V本部の効果

県V本部にはこんな効果がありました。今立VCが開設して2日目、その日のボランティアの受け人数が85名だったのです。ニーズに対し全く対応できない状態で、スタッフは焦りと不安に陥りました。それには根拠がありました。被害度の強い福井市、美山町はTVニュースにも映像がいつも流される。そしてその地域にボランティアが入れるようになると、自然にそちらにボランティアが集中するのです。そこで県V本部では、本部に問い合わせってくる県外からのボランティア希望者は全て、今立町へ行ってもらうよう調整を開始しました。今立VCのスタッフも知り合いなどを頼りに、「ボランティアが足りない、助けて！」と電話作戦を開始。その効果は週末に明確に出ました。週末には約4000人のボランティアが今立VCを訪れました。このように県V本部では、人員調整だけでなく、物資や資機材、専門スタッフなども含めて、全体的な調整を行っていきました。

また報道各社への対応も県V本部に集中させ、現地活動の妨げにならないように配慮しました。物資・物品の発注も県V本部が担当しました。各現地センターは、スコップでも一輪車でも、決められた時間までに本部に依頼するだけでよかったのです。発注作業は値段交渉や納入日の調整、支払いな

ど、かなりの作業になります。これらを、基金の関係もありましたが、本部で一括にて対応したことは、現地センターの動きを大幅に助けたことに繋がっています。

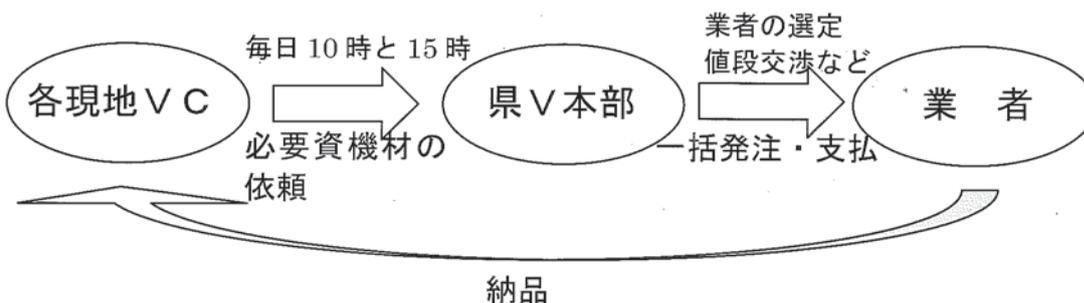


「福井県災害ボランティア活動基金」の効果

今回の取り組みで、特筆すべき点に「福井県災害ボランティア活動基金」があります。全国でも、基金を活用しての災害ボランティアセンター運営は初めてでもあり注目を集めました。

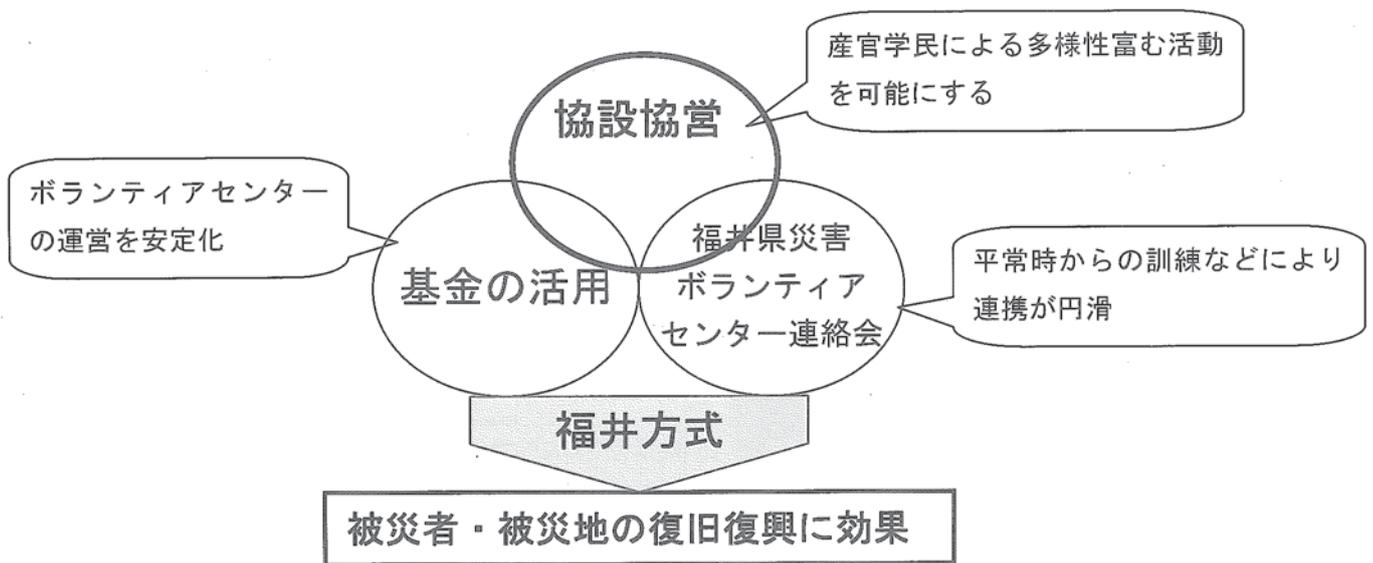
基金の最大の効果は、「必要な時に、必要な物を、必要な分だけ、用意できる。」点にあります。救援物資や支援金に頼る場合は、「必要な時に」が困難になり、「必要な分だけ」の調整が非常に難しくなり、その管理、調整のための専任者を相当数置かななくてはなりません。しかし基金を活用した場合、極少数の人員で非常に効率よく活動が出来ました。また、各現地センターの活動能力を非常に高めることもでき、この基金は非常に大きな武器となりました。

発注・納品のフロー図



福井方式

今回私たちが、このような活動ができたことには理由があります。先にも述べたとおり「福井県災害ボランティアセンター連絡会」という組織が常設されていた点と、1億3千万円の「災害ボランティア活動基金」の存在です。しかしこれらは、あくまでも仕組みでしかありません。最も効果的だったことは、官も民も一丸となって取組んだ「協設協営」の点です。これまでの災害時のボランティアセンターは、『場』は公（行政）が提供し『運営』は民間（ボランティア）が実行する、「公設民営」がほとんどでした。これには欠点があります。「公」と「民」が対立しやすく、連携が取りにくい点です。それも油流出事故災害時に経験しています。私たちは、行政もボランティアも一丸となって取組む方法を考えました。ライフラインなど生活環境を復旧する行政（官）と、生活自体の復旧の支援をするボランティアが、それぞれの特性を認め連携し合い、責任を共有し、一時も早く被災者のために復興することを目指し、一丸となって連携・協働でボランティアセンターを設置、運営していく「協設協営」の方法、これが『福井方式』です。



本部から届いた資機材（今立VC）



西川知事と打合せする県V本部センター長（松森）

福井市朝倉遺跡復旧プロジェクト

県V本部が直接センターを運営した取り組みで、「福井市朝倉遺跡復旧プロジェクト」があります。

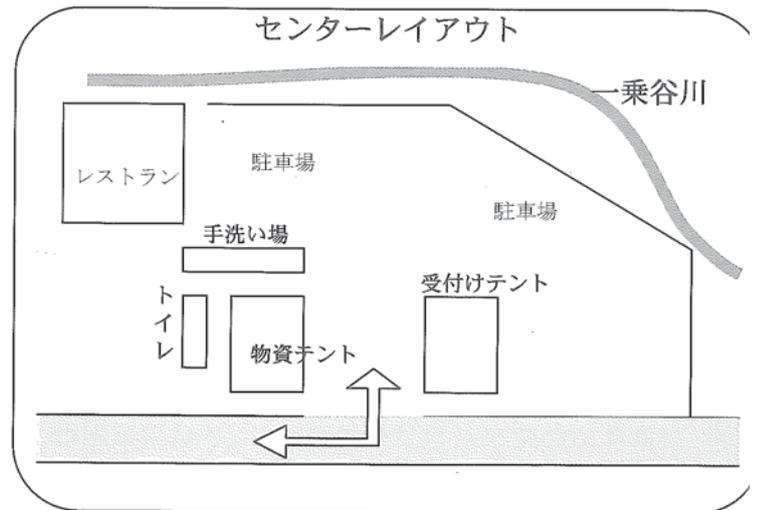
福井市一乗地区にある特別史跡「朝倉遺跡」が豪雨災害により、広大な面積の史跡のほとんどが土砂などの被害を受けました。史跡のため重機などによる作業が出来ず、全て手作業に頼るしかないと、復旧の見通しが立っていませんでした。そこで、遺跡の管理者である県教育委員会は県V本部に対し、復旧支援のためのボランティアセンターの設置を要請しました。県V本部では、朝倉遺跡は、被災地一乗地区にとっての重要な観光資源でもあり、遺跡の早期復旧は地域復興に非常に重要であると判断し、8月1日に朝倉遺跡復旧プロジェクトとして、現地の遺跡管理センター駐車場にセンターを設置、県教育委員会と協働し復旧に向けて活動を実施しました。延べ約3000人によるボランティアにより、8月6日には遺跡はもとの姿を取り戻すことができました。



遺跡の復旧作業



受付けテント



朝倉遺跡

一乗谷朝倉氏遺跡は、今から約530年前の文明3年(1471)、戦国大名・朝倉氏が5代103年間にわたって越前の国を支配した城下町跡。最盛期には、人口1万人を超えたといわれ、雄大な城下町と雅やかな文化の華を咲かせました。しかし、朝倉氏は天正元年(1573)に織田信長に敗北。火を放たれ、その長い歴史の幕を閉じたのでした。そして、昭和42年、初めて本格的な発掘調査が行われて以来、当主の館や武家屋敷・寺院・町屋・職人屋敷や道路に至るまで町並がほぼ完全な姿で発掘。平成3年には朝倉氏遺跡内の4つの庭園が、国の「特別名勝」にも指定されました。



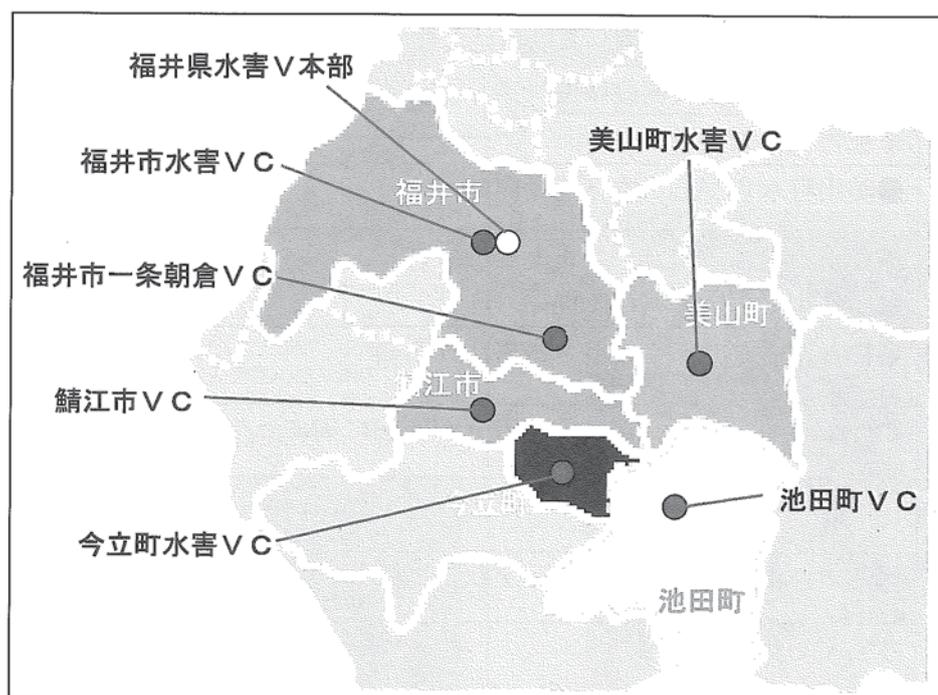
オリエンテーションをするスタッフ

発災からの経緯

月 日	活 動 内 容
7月18日 (日)	<p>福井豪雨災害発生</p> <p>19:00 県庁にて福井県災害ボランティアセンター連絡会「緊急会議」を開催 福井県水害ボランティア本部設置を決定 福井市・今立町・美山町・鯖江市を重点地区として現地ボランティアセンターの設置に向けて検討</p> <p>20:00 今立町、今立町社協、武生青年会議所、本部員により今立町水害ボランティアセンター設置のための協議をし、設置を決定。当夜に開設準備</p> <p>21:30 福井市、福井市社協、福井青年会議所、本部員により福井市水害ボランティアセンター設置のための協議をし、設置を決定。開設準備に入る。</p> <p>※被害状況調査開始</p>
19日(月)	<p>●福井県水害ボランティア本部 本格活動開始 各現地ボランティアセンター（以下VC）設置のための準備に入る。</p> <p>●今立町水害VC 本格活動開始 広報、ニーズ受付などを開始する。</p> <p>※福井市水害VC 設置場所調査。福井市月見3丁目の赤十字病院駐車場に決定。設営に入る。県本部用のコンテナも同所に設置する。</p> <p>※鯖江市NPOセンターにてVC設置のための協議</p> <p>※被害状況調査</p>
20日(火)	<p>●福井市水害VC 本格活動開始 広報、ニーズ受付などを開始する。</p> <p>※国道158号線通行可能となる</p> <p>※美山町、美山町社協、本部員により美山町水害VC設置のための協議をし、設置を決定。当夜に開設準備</p> <p>※被害状況調査</p>
21日(水)	●美山町水害VC 本格活動開始
22日(木)	<p>福井市一乗地区にサテライト基地設営</p> <p>●鯖江市VC 本格活動開始</p>
23日(金)	●福井市一乗サテライト 本格活動開始
24日(土)	ボランティアのピーク。約1万人が支援に集まった。
25日(日)	
26日(月)	鯖江市、池田町へボランティア状況調査
27日(火)	<p>水害VC代表者会議 (鯖江市あいあいプラザ) 19:00～</p>

	進捗状況報告、問題点等の協議、今後の見通しなどを話し合う。
28日(水)	■池田町ボランティア受付終了
29日(木)	
30日(金)	■今立町水害VC 受付終了
31日(土)	
8月1日(日)	朝倉遺跡復旧プロジェクト開始準備
2日(月)	●朝倉遺跡復旧センター 本格活動開始
3日(火)	■美山町水害VC 受付終了
4日(水)	■福井市一乗サテライト 受付終了
5日(木)	■福井市水害VC 受付終了
6日(金)	■鯖江市VC 受付終了 ■朝倉遺跡復旧センター 受付終了
7日～13日	各被災地の社協にて受付(予備)
13日(金)	福井県水害ボランティア本部 解散式

各水害ボランティアセンターの設置場所



ボランティア活動者数

月日	福井市水害 VC	福井市 一乗朝倉VC	鯖江市VC	美山町水害 VC	今立町水害 VC	池田町社会 福祉協議会	合 計
7月19日	180		—	17	140	—	337
7月20日	783		258	246	85	—	1,372
7月21日	561		490	901	345	—	2,297
7月22日	1,675		835	1,085	721	—	4,316
7月23日	1,825		1,287	1,194	1,400	—	5,706
7月24日	1,458	1,682	1,621	3,055	1,500	552	9,868
7月25日	1,308	1,072	1,865	1,760	1,077	551	7,633
7月26日	781	308	770	1,245	687	87	3,878
7月27日	597	500	668	1,036	908	109	3,818
7月28日	523	1,152	872	848	553	—	3,948
7月29日	550	715	551	1,181	344	—	3,341
7月30日	530	544	448	909	15	—	2,446
7月31日	492	1,138	381	1,094	—	—	3,105
8月1日	378	1,325	411	1,097	—	—	3,211
8月2日	191	613	169	363	—	—	1,336
8月3日	172	829	204	356	—	—	1,561
8月4日	130	732	129	—	—	—	991
8月5日	242	155	143	—	—	—	540
8月6日	0	311	50	—	—	—	361
8月7日～ 13日	143	—	—	—	—	—	143
合計	12,519	11,076	11,152	16,387	7,775	1,299	60,208

※このボランティア数は各ボランティアセンターに登録して活動しているボランティアの合計であり、町内や直接親戚、知人宅の手伝いをしている方の数は含まれていません。

※ボランティア受付

池田町：7月28日をもって終了

今立町：7月30日をもって終了

美山町：8月3日をもって終了

福井市一乗地区：8月4日をもって終了

(ただし朝倉氏遺跡は8月6日まで)

鯖江市：8月6日をもって終了

福井市みのり地区：8月5日をもって終了

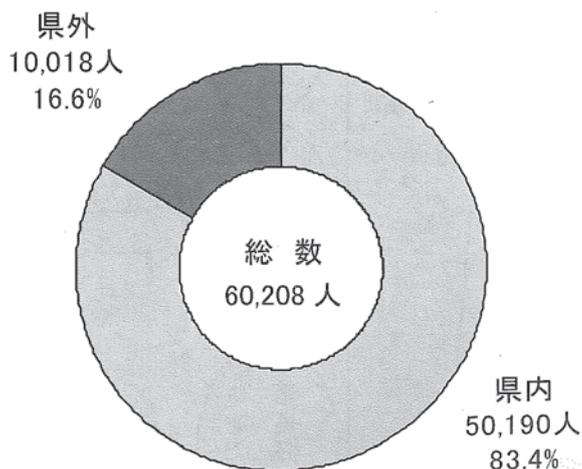
※各現地ボランティアセンターでの受付終了後、

福井県ボランティアセンターおよび各被災地

(市・町)の社会福祉協議会で、8月13日まで

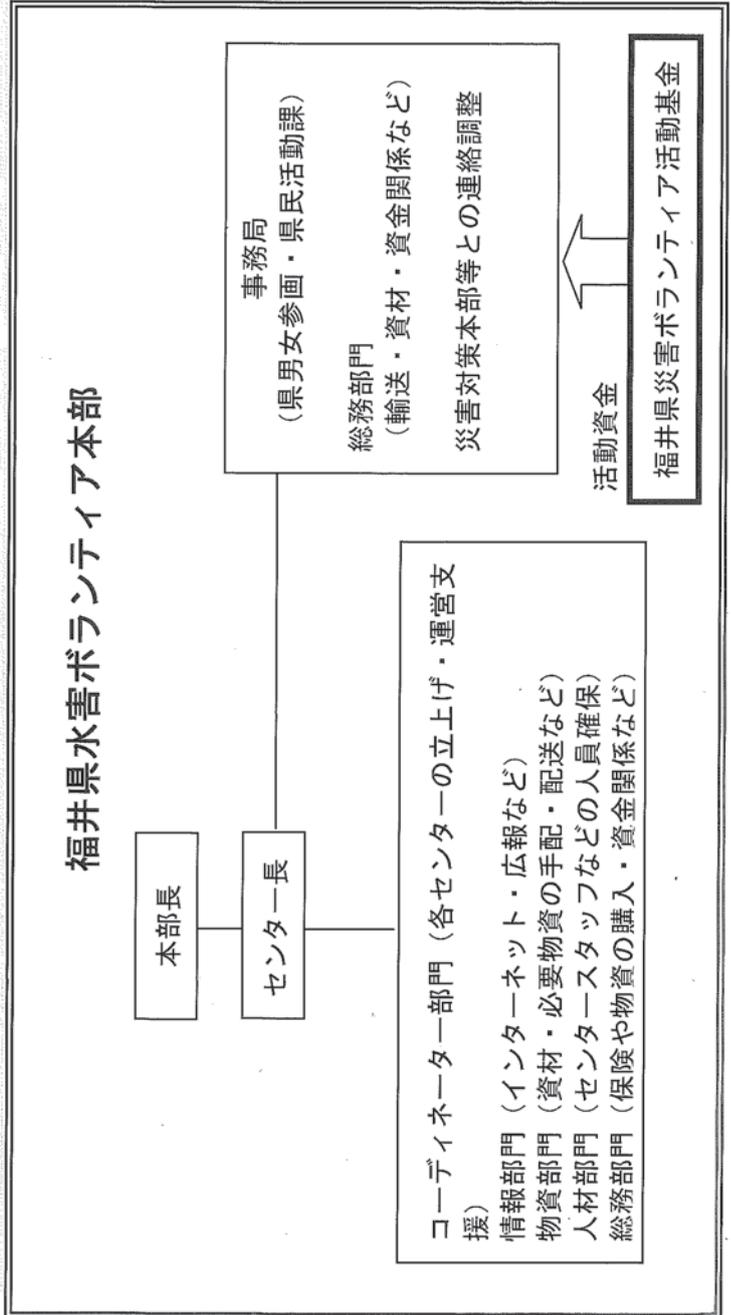
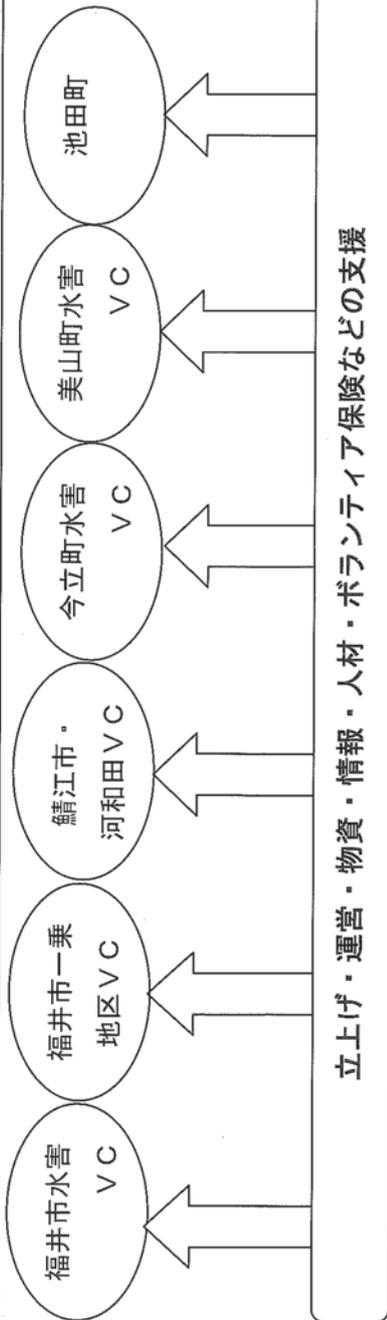
で相談等を受け付け対応しました。

活動者の内訳



福井県水害ボランティア本部組織図

救 援 活 動 の 展 開



福井県災害ボランティアセンター連絡会

環境ふくいき推進協議会

(社) 日本青年会議所福井ブロック協議会

日本赤十字支社福井県支部

日本労働組合総連合会福井県連合会

福井県企業等ボランティア・社会貢献連絡会

福井県国際交流協会

福井県山岳連盟

(福) 福井県社会福祉協議会

福井県生活協同組合連合会

福井県壮年団連絡協議会

福井県レクリエーション協会

福井県連合青年団

福井県連合婦人会

福井県老人クラブ連合会

(特) ふくい災害ボランティアネット

設 置

「福井豪雨災害を振り返って」

平成16年7月18日、日曜日の朝、「福井市内が昨日からの雨で大変なことになっている。」と言う青年会議所メンバーの一本の電話から私の福井豪雨災害が始まりました。すぐに福井市足羽山西側にある仕事場（老人福祉施設）へ電話すると、すでに施設の周りは10cmの以上の冠水。急いで仕事場へ駆けつけると建物は沼に浮かぶ建物の様になっている状態でした。福井市内の足羽川破堤に備え、非常食・貴重品類を確認し、破堤と同時に施設利用者80名を職員と共に施設の2階へと避難誘導。また、在宅福祉担当職員には在宅福祉利用者・地域の独居高齢者等への安否確認を指示し、1m近くの泥水に囲まれ施設で日勤職員と共に引き続き不安な一夜を過ごしました。幸運にも施設内へ浸水せず、明け方には泥水も引き、ボイラー故障以外に大きな被害もなく済む事ができましたが、これらの経験は災害時の災害弱者救済の大切さ、そしてその困難さをあらためて知ることとなりました。

今回の豪雨災害において、福井県内の10の青年会議所は各地水害ボランティアセンターの立ち上げ、運営のコーディネイト役、ならびに復興活動。（社）日本青年会議所福井ブロック協議会としては、福井県水害ボランティア本部スタッフとして各地水害ボランティアセンターの立ち上げ・運営サポート、物資、運輸、情報等の担当を行わせていただきました。

私は被災した仕事場が一段落した20日より福井市みのり地区に開設されたボランティア本部スタッフとして参加させていただき、ボランティアセンターの終息までたずさわらせていただきました。

私は主に各地センターへの物資と運輸を担当させていただきましたが、福井市水害ボランティアセンターと近接していたため、センターに来られるボランティアの方々には後方支援の大切さを説明しながら、延べ約130名の車両・運搬ボランティアの方々の手助けをいただき、各地センターがボランティア活動に必要としている物資を送り込むことが出来ました。これらの背景には、平成9年のロシアタンカー油流出事故時の経験を活かし、災害時のボランティア活動のための福井県災害ボランティアセンター連絡会の設立、当時の義援金等による福井県災害ボランティア活動基金という基盤があり、この事が行政と民間団体等が対等に、そして責任を共有することでお互いの特性を活かしながら共に汗を流す「協設協営」としてボランティアの活力を活かした災害復興支援となり、そして、平常時からのネットワーク、「人と人の繋がりから生まれる信頼」が人・物・金・情報の循環に繋がり、早期の復興活動に繋がっていったと考えます。

望まぬ有事に備えて共に理解し合う「協働と連携」こそが、明るい豊かな社会を支える大切な裏付けとしての基盤の一端を担うということを、今回の福井豪雨災害を通して痛切に感じました。

福井県水害ボランティア本部 スタッフ 小川 弥 仁

所属団体 2004年度（社）日本青年会議所 福井ブロック協議会 副会長

「振り返ると」

福井豪雨。前日から新潟豪雨のボラに出かけていた私たちに入った第一報。地元福井で記録的な大雨。これはやばいと帰福の途中、足羽川決壊の連絡が入る。災害はいつどこで起こるかわからない。ついに地元福井で起こってしまった。この日から暑くて長い日々が始まる。

毎日VCに入ってくる要望と悲痛の叫び。行政とJC・生協・NPOなどの連絡会メンバーが、まさに産官学民一体となり、多くの問題に立ち向かった活動となった。私は右往左往するばかりで、対応に追われる毎日。

発災から半年が経ち、当時のことを思い起こすと、今も目の奥が熱くなってきます。

みなさんの熱意とボランティアの活躍、本当にありがとうございました。

福井県水害ボランティア本部 スタッフ 竹内 晶

所属 NPO法人ふくい災害ボランティアネット

「福井豪雨災害における協働の取組」

刻一刻と変化する被災地の状況に災害ボランティア本部は的確に対応しなければなりません。そこには、柔軟性や迅速性、そして創造力が何より求められました。

通常、行政に期待されることは、安定的、継続的そしてなにより公平にサービスを提供することです。一方、民間の組織が得意とするのは柔軟性であり迅速性です。協働の現場ではお互いがそれぞれの特性を理解し補いながら一緒に行動することが重要でした。

福井豪雨災害における災害ボランティア本部での私の主な役割は、災害ボランティア活動に来ていただいた方々のお力を、迅速な被災地の復旧に結び付けるための必要資材の発注・管理でした。物流を一手に引き受けてくださった青年会議所の方々や現場に足繁く通うことで点を面にして総合的にコーディネートされていたNPO法人の方々、さらに社会福祉協議会の皆さんと一緒に悩みながら物資の調達をしました。官主導でもなく民主導でもない、お互いの特徴を活かし責任を分担する、これまで机上でしか論じてこなかった協働の理念に立った活動を心掛けました。

今思うと、行政職員としては非常に特異な関わりだったと思います。NPO法人の方々と新潟豪雨災害の現場から帰って来た夜一緒に災害ボランティア本部設置会議に出席し、翌朝、青年会議所の方々との打ち合わせをしてテントやスコップなどの必要資機材を発注し、その後、社会福祉協議会の方々と現地ボランティアセンター設置場所確保のための泥かきをし、現地本部の撤収までほとんど現地に詰め、夜中以外は職場に戻ることはありませんでした。

被災者の方々のためにという同じ目的を共有しながら、様々な職種や立場の方々と一緒に活動をさせていただくことができました。共に汗を流すことで組織を超えた信頼関係を築き、そうした仲間と悩みながら問題を解決していくことのダイナミズムを体験できたことは、大きな財産となっています。災害ボランティア活動に駆けつけてくださった方々は勿論ですが、共に闘った仲間には言葉にできないくらい感謝しています。また、こうした機会を与え見守ってくださった上司に恵まれたことも幸運でした。皆さん本当にありがとうございました。

福井県水害ボランティア本部スタッフ

福井県県民生活部男女参画・県民活動課 山口晋司

朝倉氏遺跡復旧プロジェクトに寄せて

「朝倉をやってみない？」

そう松森氏に言われたのは7月末、ちょうど今立のセンターが活動収拾に向かって最後の仕上げの段階に入った頃だった。

「県教委の依頼だし、ぴったりだよ。」

そうとも言われた。・・・確かに自分は教員、遠足で朝倉氏遺跡を訪問したのもつい2年前である。聞けば遺跡は地元にとっての「顔」、観光収入の生命線であるという。早速赴いてみると、そこは遺跡の調査員さんの指示に従いながら、人数限定で土砂をよける灼熱の土砂作業の現場。しかも、他の現場だったらボランティアに対する「ありがとう」の声が聞こえるところなのだが、遺跡は泥をどけても語らない、ただひたすら埃の舞う一風変わった現場だった。

まずは活動に必要な機材をそろえなくてはならない。V本部が、電話でこちらの要求を聞いて直ちに手配。次々と一輪車やスコップ、み、鍬などが届く。「トイレ、欲しいよね。」と言ったら、2時間後には簡易トイレが届いた。これにはさすがにびっくり！



スタッフとしては、今立VCで衛生・健康管理に活躍した水野氏、実務的な運営の中核で統括していた田中氏を呼び寄せる。共に同業者なので、奇しくも教員3羽ガラスができあがる。さらに、魔法のように物資を手配してくださったK氏中心に、JCの会員や県教委、福井市のVCから引き抜かれたスタッフが毎日交代で詰めてくれた。

「本館」「南陽寺」「中惣」「権殿」・・・きっと昔は大事な建物が建っていたのであろうそれら現場で、毎日200名あまりの団体ボランティアさんが作業に当たった。高校生の団体、県立学校教員、行政や社協の団体は、きっと職場で借り出されてきたのだろう。遠く静岡・京都から駆けつけてくれたNPO仲間のボラバスは、さすがボランティア精神万点で、非常に積極的・精力的にお手本のような活動を行ってくれた。「勉強のために」と、若い秘書軍団(+国会議員)を送り込んできた政党もあった。現場では肩書きや性別・年齢・職業、そういったものにとらわれず、皆が等しくマスクにスコップで黙々と作業を行う。私はそういう現場の姿が大好きだった。



運営で最も気を配ったのが、熱中症対策である。あっという間に40度を超える気温にすさまじい埃との戦い。十分な水分・塩分に休息、そして「福井梅」をと、呼びかけた。

幸いたいた事故もなく活動終了できたのも、V本部の物資支援のおかげと感謝する。

最後に、毎日現場で作業を指示された調査員さん、受付や水運びを黙々とこなされた県教委の(えらい)方々。どうもお疲れ様でした。いろいろな人と出会えて、共に活動できたこと、今となってはとても思い出深い体験です。どうもありがとうございました。

ふくい災害ボランティアネット

細川 かをり

今立町水害ボランティアセンター



被害の概要

被害エリア

- 服間地区服部谷、南中山地区
(服部川流域)
- 服間地区水間谷 (水間川流域)
- 岡本地区月尾谷 (月尾川流域)
- 岡本地区大滝 (岡本川流域)
- 粟田部富永地区、南中山地区
(鞍谷川流域)



岡本川が溢れ濁流にのまれる大滝地



陥没した道路



土石流が集落を襲う (柳)

人的被害

死亡 1人
 負傷 (重傷) 2人

被害件数

◆住宅被害

全壊	半壊	一部損壊	床上浸水	床下浸水
2	5	23	271	592

◆非住宅被害 公共建物5棟、その他1,061棟

◆その他

田 (流出等)	田 (冠水)	畑 (流出等)	畑 (冠水)	文教施設	道路
70ha	320ha	5ha	20	5箇所	64箇所
橋梁	河川	砂防	がけ崩れ	水道	ブロック塀等
5箇所	57箇所	20箇所	7箇所	222戸	13箇所

活動の経緯

7月18日(日) 午前7:30 発災

午後7:10 今立町水害ボランティアセンター設置 (ふれあいプラザ)

7月19日(月) 午前9:00 センター業務開始

【初動時の活動】

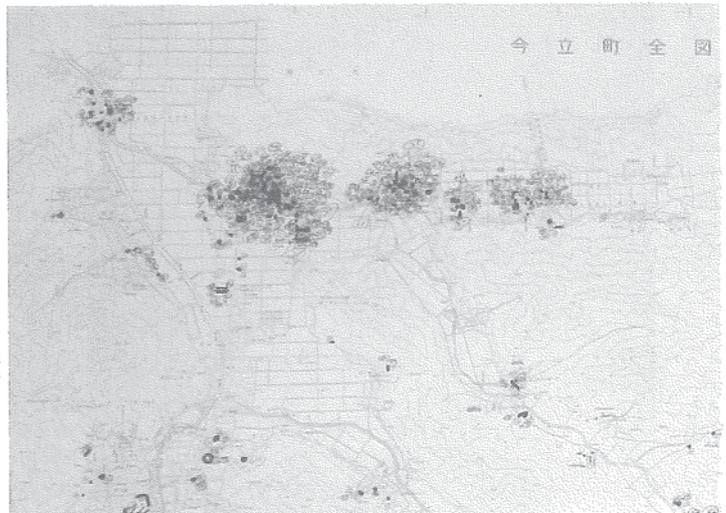
- センター設置に関する広報活動
(チラシ配布、ポスター掲示、広報車)
- 独居高齢者の安否確認
- 県水害ボランティアセンターを通じての
活動者の募集
- 個人宅の居住スペースの復旧活動
(床下泥出し、不用家財の撤去など)



発災直後の今立町柳

【中盤の活動】

- 活動場所への送迎車の手配
- 体調管理、衛生面の徹底・改善
(水分・マスク・ゴーグル提供。手洗い、眼洗い、うがい場の改善)
- 個人宅の復旧から企業関係へ活動範囲を拡大
- ローラー作戦 (作業の収束状況の調査と新しいニーズの掘り起こし)



ローラー作戦によるニーズ掘り起こし状況図

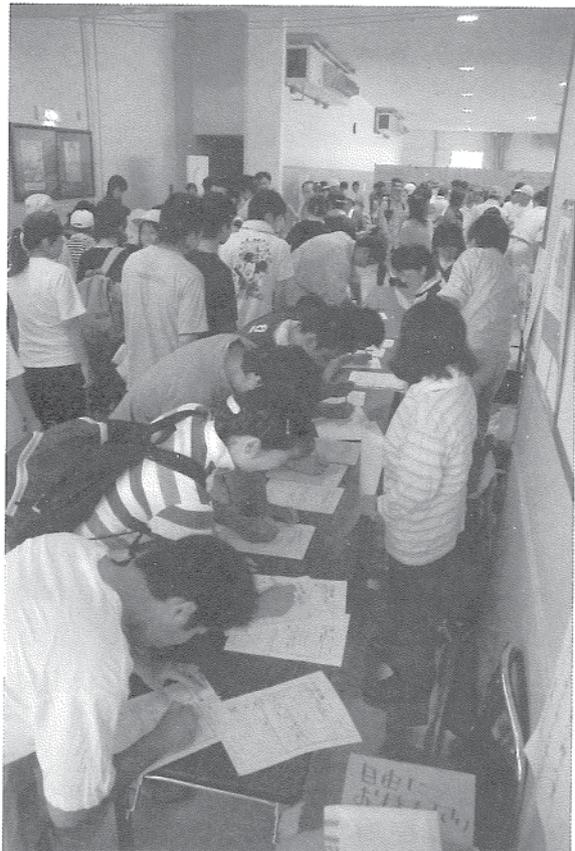
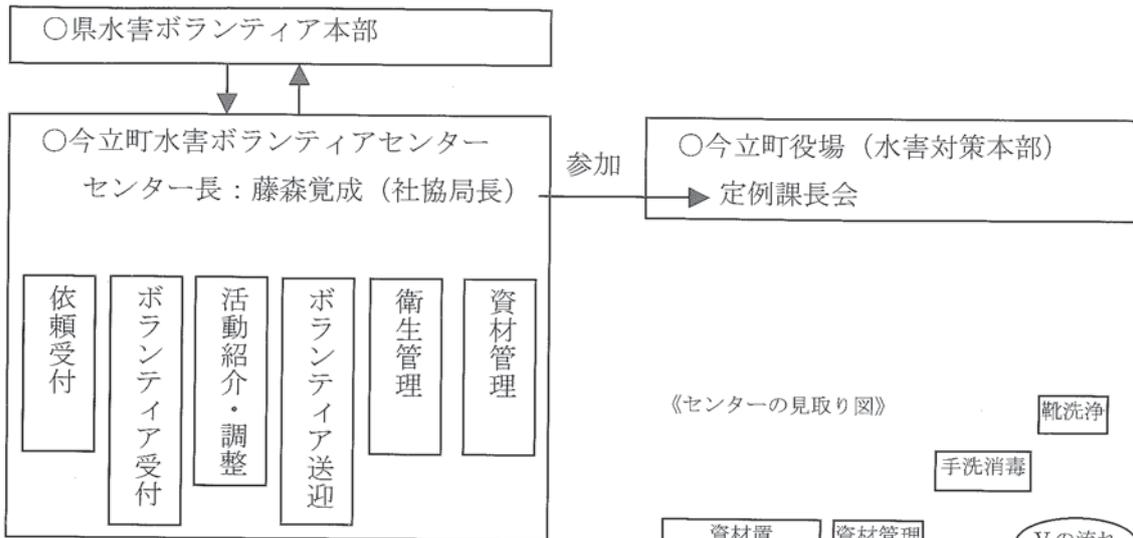
【終盤の活動】

- 被災地個人宅の復旧状況の確認
- 今立町水害ボランティアセンター収束に向けての準備

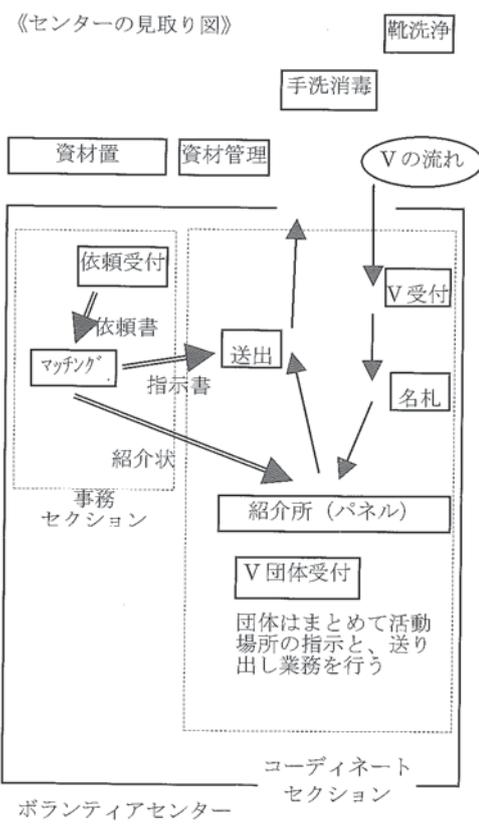
○台風接近に備え2次災害対策7月30日(金) 今立町水害ボランティアセンターを社協事務所へ移動

8月13日(金) 今立町水害ボランティアセンター解散

組織とセンター配置



↑受付の風景 ↓電話などの受付



ボランティアセンターの入口



活動内容

- チラシ配布、ポスター掲示、広報車による広報活動
- 個人宅の居住スペースの復旧作業
(床下からの泥のかき出し、家財の洗浄など)



泥だしをするボランティア



建具洗いをするボランティア

- チェックマップの作成 (依頼先とその復旧状況を地図にポイントング)
- ローラー作戦 (被災地へボランティアを派遣。作業の収束状況を調査しながら、ニーズの取りこぼしがないか、新たなニーズの掘り起こしを行いその場で対応)
- ボランティアの体調・衛生管理

活動先へ向かう際に、水分、マスク、ゴーグルを提供。

活動後センターへ戻ってきたボランティアの靴の洗浄から、手の消毒、眼洗い、うがい。

(ボランティアの増加に伴い、規模拡大・新器具設置など日に日に改善されていった。)



長靴の洗浄・消毒



手洗い・消毒

今立ボラセン物語 (記録 田中尚美・細川かをり)

7月19日…「今立町水害ボランティアセンター活動開始」

V (ボランティア) が足りないので広報する。

センター長が「ちらし」を配り、ニーズの呼びかけをする

7月20日…「午前中10人!今立が危ない!!」

Vが来ない。本部に調整を依頼。

Vにもチラシを持って現場へ行ってもらう

めまぐるしい毎日、この2日間でスタッフも流れが分かってきた。

次の日から各部署で大改善が始まる



今立VCの入口

7月23日 (金)

- ・駐車場リニューアル…バス3台本格ピストン輸送、混雑が解消する
- ・団体様大盛況デー…本部調整および呼掛けの成果あり
- ・ローラー作戦始める…大谷、南中地区 (結果、大谷地区にニーズあり)
- ・脱水症状1号…高校女子

この日の問題点、改善点

- ・団体へのレクチャーが不十分
- ・流れが良くない
- ・バスのピストンが効率悪い
- ・ローラーのペーパー処理の仕方
- ・受付で困ったこと
- ・救護の必要性
- ・紹介所の貼り方に工夫がほしい
- ・スタッフが大変

- ・スタッフのたまってきた思いは
- ・改善点は

この日の苦情

- ・すぐ来ないのか!・中学生は大人じゃない!・男がほしいのに女が来た!
- ・(役場に言ってもしてくれないので) Vで土砂をどうにかしてほしい 等々

7月24日 (土) 「今日も大盛況」

- ・ローラー少しずつ開始…長谷、北坂下、赤谷地区
- ・水分を多めに渡せ!&現場へ持って行け!作戦
- ・手洗い用消毒剤 (オスバン) 使用中止…石けん方式、字ではなく絵で書いて掲示分りやすくなった
- ・ゴミはどこへ?…区長さんが一筆書いて南越へ
- ・足洗い場、手洗い場が更に進化!

この日の問題点、改善点

- ・〈電話受付〉ペーパーの流れ良くない → 書き写している内に抜け落ちがある!
- ・〈V受付〉名簿の仕分けの工夫 → 県内外別、50音順
- ・〈報告書受付〉ちゃんと戻ってこない! → 渡した場所に戻すことにしよう、団体は団体名を記すこと、継続かどうか聞こう
(この部門でVに伝えることが日々増えていく)
- ・〈飲料水渡し部門〉飲み物をスーパー袋に入れて次々渡していった、混雑解消!
- ・〈駐車場〉熱い中大変! → この日は10人~12人配置、交代制でやった
- ・〈資材〉一輪車、スコップ過多 → 河和田、美山へ
- ・〈洗い場〉どんどん進化!呼びかけて徹底した。足マットも作り汚れを持たないようにした。
- ・〈バス〉日々人が替わり大変 → 帰りは、連絡を受けて迎えに行くことに

次の日はこうしよう

- しっかりやる、特に中学生の団体 (教員のレクチャーにもなる)
- 団体は奥へ入れる、団体受付も別にする
- 三つの谷でピストンしよう、帰りは定期便にしよう
- 継続は指示書を出す
- ニーズで緊急性のあるものが分からないので「V要請は初めてですか?」と聞く
- 受付を増やそう、飲み物置き場を作ろう
- 救護セットをおこう、救護の人は?
- 地区別、等 この部門は大変なので、出来る人を育てないと
- スタッフをローテーションして、どの部門でも出来るようにしていかないと
- センター長が聞く
- 今日出た、改善点は今日中にしよう!

本日の良かった点

- ・流れが良くなった！Vも落ち着いて流れていた ・消毒もちゃんとしていた
- ・Vがすんなりセンターから帰った（5：15にはなくなる）
- ・スタッフ数が多いので、入り口で出迎える人までいた（Vのマナーが良かった、秩序があった）
- ・今日も改善点は今日中に！

7月25日（日）「ますますヒートアップ今立」

- ・ローラー 長谷、南坂下地区
- ・よみがえれ今立シール売り上げ、10万円！美女効果か！？ ・立ちくらみで男性倒れる

この日の問題点、改善点

次の日はこうしよう

- ・大型バス 柳地区Uターンできない
- ・重機ニーズが増えてきた → 次の日の重機確保、運転手確保、捨て場確認
- ・ペーパー書き写し漏れで、受付に苦情が増える
- ・〈受付〉紹介表がないのに指示書がある → Vが勝手に持って行く、継続のペーパーが重複している
- ・〈アナウンス〉Vに十分伝わってない 仕方が悪い → 人を集めてアナウンス
- ・報道対応に時間がとられる → 数字的なことは本部発表にする

本日の良かった点

- ・乾燥してきた泥のほこりがひどく、とにかく水をまいた ・センター内の掃除
- ・午前9：30で一段落！（あつという間にVCが流れる）
- ・午後5：10でVが引いた！流れがいいので帰るのも早い
- ・皆さん大分お疲れ、少し楽に行きましょう、で閉める

7月26日（月）「医療班に機動性を！」

- ・バス4台、軽トラ2台、トラック2台出動
- ・（いっぱいいっぱいの）区長対応の仕方
- ・月曜日ながらもまずまずのV数
そろそろV数が余り気味になりつつある、検討し始める
- ・朽飯地区で、まだひどい家を一軒一軒訪問



活動現場へ向かうボランティア

この日の問題点

- ・午前中 朽飯地区で巡回中の医療班発見。1週間前に全件回り、その時問題があった家だけをまわっている。ちなみに朽飯地区は3件。医療班がまわっていない家で、具合の悪い人発見！
- ・疱疹のでていた男性…日中はVがいて家を空けられない。また、日中行っても待ち時間長い。優先してもらえないか。医療班は来たが、特に何もしてもらってない。夜間診療に行ったが二日で8000円。高くしてそれがストレスになる。→Vセンターで診てもらえることを話し、すぐに行ってもらった。
- ・（暑い中）床板をめくった部屋で、ぐったりとしていた夫婦発見。センターに行くよう勧めたが奥さんはセンターに行く元気がない、と言ってだめだった。
- ・ご主人がだいぶんまいっているのに休まない、と奥さんが訴えるので、ご主人にセンターを勧めたがだめ。一応センターの医療班のことを話しておいた。
- ・（東庄境地区）ご主人が倒れて点滴を打ち、元気になったからと作業をしていた。そのお年寄りが寝たきりなのでセンターで診てもらおうよう勧めたが嫌がった。先生に話したところ、「俺が連れてくる！」直接上記の家に行ってもらおう。同時にセンター医療班を今寿園に移すように指示してくれた。
- ・結果、一人は重傷なので連れてきた。肋骨にひびが入っていた。点滴をする。明日は、ご主人が来るように、約束してもらおう。（結局次の日に夫婦で来た）後の方は来るのを嫌がったが、先生がしっかり診てアドバイスされた。
- ・今寿園の医療班のことを知らないで、朽飯、東庄境、西庄境地区は一軒一軒広報してまわった。（次の日、この地区の人達が今寿園に来ている）
- ・この後、巡回医療班と話しをする。状況を話し、巡回の仕方をもう一度検討してもらった。今寿園のことも広報すると言ってくれた。

次の日はこうしよう

- ・（Vの送り出しで）「家の人には休むように声かけして下さい」と言う。
- ・市野々、柳地区に一気に送り込む。

7月27日(火) 「被災者も、スタッフもふらふらです」

- ・ニーズの優先順位をつけるようにする
- ・今週に通過が予想される台風対策開始
- ・土、日の団体受付しない。金曜日で終了する
- ・市野々、柳地区をJ Cの人5人一組でローラー。土嚢対策が必要なところを診てもらう。
(町に台風対策を聞いたが応答なし)

この日の問題点

- ・ニーズ対応では、細かい応答が必要(そのニーズはどのくらい緊急性があるのか、被災者が休みたいからか、どのくらい継続で行っているか等)

次の日はこうしよう

- ・高校生の団体は予約制
- ・過剰Vは鯖江などを紹介する

7月28日(水) 「終結間近」

- ・団体でできるところを優先(明日からは団体が来ない)
- ・市野々地区の台風対策の土嚢積み J Cさんに現場監督を依頼
- ・団体を次々送り込み土嚢作り、土嚢積み
- ・放置物資の回収 ・団体は5:00終了時点で電話連絡する

この日の問題点

- ・柳地区で重機にVが乗っていたことが判明。今日でVの重機は止め。区長には了解を得る。

7月29日(木) 「今立Vセンター終了」

- ・バス2台
- ・柳地区の土嚢作業
- ・9:20 V受付閉鎖
- ・企業は今日で終了
- ・ニーズ2件(入院していた一人暮らしの家)
- ・物資を朝倉へ搬送
- ・3:30今立Vセンター終了、をプレスへ流す

この日の問題点

- ・柳地区 業者が入っている家にVも同じ仕事をさせられていた。
- ・木の切り出しまでさせられた。→Vの作業の最低ラインをはっきりさせる。
- ・一乗、美山はV受付を一次ストップ

7月30日(金)

(細川、田中、水野、朝倉プロジェクトへ)



元気いっぱい！活動を終えた高校生ボランティア

活動した人の感想

ボランティア体験談

岩坂昭宏

私は今回、知人の誘いでボランティアセンターに詰めておりました。現場でスコップを振ることしか頭になかったのでセンターに留まり裏方に徹するというのは正直戸惑いましたが、非常時に文句を言っていられません。素人ながら仕事に取り掛かりました。まずは地元の人の動員。様々な地域活動に参加していたので容易かと思いましたが、大間違い（泣）。当然のことですが災害時は地元の人には手が離せません。例え本人が被災していなくても親類に手伝いに行かねばならなかったり、役員をしている人は保育所や学校、住んでいる地区の復旧作業を優先しなければなりません。結局、他の地域の方々の力に頼らざるを得ない状況でした。それもマスメディアの力によるところが大きかったと思います。また団体も規模が大きい場合、呼びかけから実働まで日数を要するようです。本当に人を動かす難しさを痛感しました。それだけにボランティアに参加していただいた方には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。仕事を休んできてくれた人たち、遠方から来てくれた人たち、母校からバスが到着し後輩たちが続々と降りてきたときには涙が出そうでした。そして、センターで黙々と仕事をこなす役場の職員さん、そして指揮を執っておられるボランティアネットの方々、通常の仕事もこなしながらの激務、さぞ大変だったと思います。当然この中にも被災者は多数おられました。本当に頭が下がります。

他にも様々な仕事を通じて有意義な体験をさせていただきましたが、いろんな意味で人の力の大きさを再認識しました。決してあってはなりません“次”への備えとして胸に刻み込んでおきたいと思います。

今立ボランティアセンターでの12日間で学んだこと

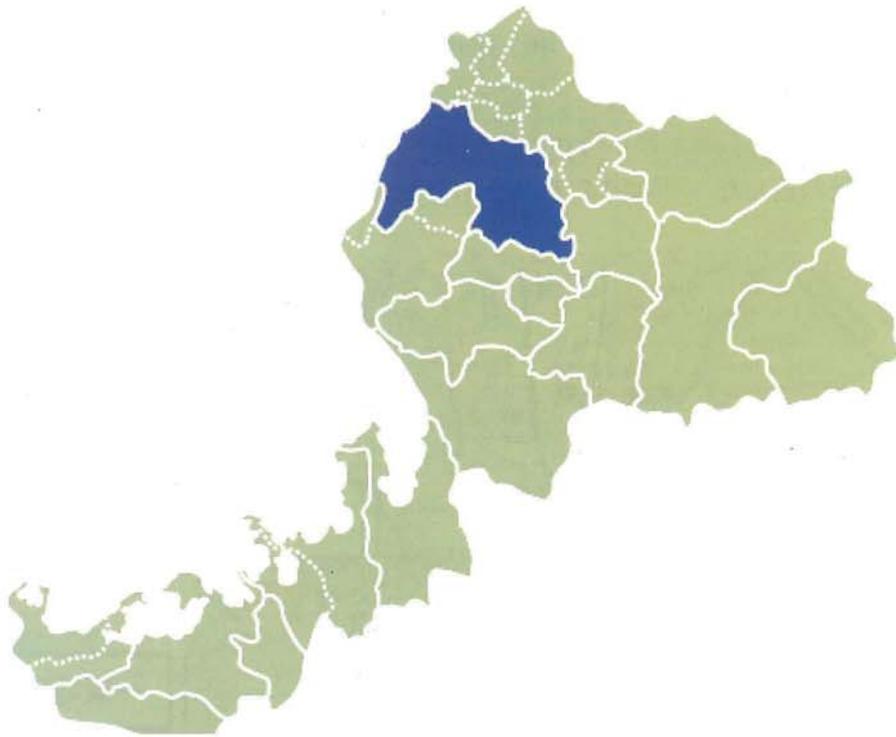
田中尚美

7月18日、夜11時頃立ち上げ準備を終え、翌19日オープン。7月29日閉じる。たった12日間なのに、今思い出してもすさまじい日々でした。8月の終わり、私は「今立ボラセン物語」と題してセンターを運営していた者の立場から、12日間のことをまとめました。ここで学んだことは絶対、次に活かさないといけない！という強い思いがあったからです。しかし、内容があまりにもリアルで、書いていても当時の思いがまた沸々とこみ上げ、頭が熱くなってくるので、これじゃいかんと思い、仲間の細川かをりさんと一緒に「物語」風に仕上げってみました。変な言い方ですがなかなかの出来です。（※前項に掲載）

私は今回の活動を通じて、水害が私たちに何を伝えようとしているのかを感じ、学ぶべきだと思いました。この水害での経験が世代を超えた自分たちの子孫に大きく影響することを考えると、しっかり検証し、自然と共に歩いていく道を模索していくべきです。もし、今年も災害が起きボランティアセンターを運営するようなことが起きたら・・・、正直嫌です。あのような体験はできればしたくないです。とてもつらかったです。福井豪雨災害の後、台風23号で京都府や兵庫県、岐阜県などに大きな被害が発生しました。その中の京都府宮津市、舞鶴市で立ち上がったボランティアセンターのお手伝いに行かせてもらいましたが、いっぱいいっぱいのスタッフの姿から、そのつらさがよくよく伝わってきました。だから少しでも私の経験が助けになれば、という思いで県外のボラセンに赴きました。

私は今立の住民ではありませんが、ボラセンを通して今立がとても好きになりました。地区も覚えました。いかに今立が自然豊かでいいところであるか気づきました。そして、いざというときのための日常の大切さも体感できました。今立ボラセンのことを語らせたなら、もっとスペースが必要なので、残念ながらこのへんにしておきます。

福井市水害ボランティアセンター



ボランティアセンター（VC）の概要

(1) 設置場所

都市部（みのり）と農山村部（一乗）に開設
計2ヶ所にセンター設置

※みのりでは、一乗を除く全地区を担当。日
之出、松本、麻生津、本郷、酒生、文殊、上
文殊、六条、東郷へもボランティアを送り出
した。



広範囲で泥の海となった福井市みのり地区

(2) 設置期間

みのり 7月19日（月）～8月5日（木）

※準備、撤収日含む

一乗 7月23日（金）～8月4日（水）

※準備、撤収日含む

※ VC閉鎖後 8月6日（金）から福井市社協（市中心部）内に常設している「福井市ボラ
ンティアセンター」で対応した。（10月23日で依頼は途絶えた）

(3) ボランティアの人数等

のべ23, 595人のボランティアをコーディネート（みのり・一乗合計）

(4) 依頼方法と件数

ボランティアの依頼方法は、

みのりでは、個人単位で依頼が基本 : のべ1, 806件

一乗では、自治会単位が基本 : のべ55件（一乗地区内6自治会）

(5) ボランティアの活動内容

家屋内・敷地内の泥出し、空き地の泥出し、無人家屋の泥出し（本人入院中も含む）、パールの
の床板めくり、買物代行、義援物資運搬（公民館→自宅）、側溝掃除、消毒作業、ゴミの搬出、
荷物運搬＝引越、壁・塀の洗浄、話し相手

※復旧が進むにつれて急を要しない依頼が増えてきた。



センター設置場所となった日赤駐車場
泥を退けることから始まった

(6) VCの活動内容

1. 受付班
 - ・被災者ニーズ
 - ・ボランティア受付
2. コーディネート班
 - ・地図・指示書作成
 - ・送り出し
 - ・輸送
 - ・オリエンテーション
 - ・特発対応
 - ・活動報告
3. 物資班
 - ・数量管理
 - ・発注
 - ・洗浄
4. 衛生管理班
 - ・救護
 - ・環境整備
5. 総務
 - ・全体的な調整
 - ・調査隊

(7) スタッフ構成

項目	みのり	一乗
運営の中心	福井市社協、福井青年会議所(JC)、福井市ボランティア連絡協議会、市役所市民協働推進課、ふくい災害ボランティアネット(県水害ボランティア本部のバックアップあり)	福井市社協、福井青年会議所(JC)、市役所市民協働推進課、ふくい災害ボランティアネット(県水害ボランティア本部のバックアップあり)
スタッフ内訳	応援社協(県社協、県内市町村社協、他県の社協)、応援JC、宗教団体系ボランティア、個人ボランティア(福井在住の学生・社会人中心)	応援社協(県社協、県内市町村社協、他県の社協)、応援地区社協、応援JC、個人ボランティア
スタッフ数	10~30人	10~20人

(8) VC運営を時系列的に見ると・・・

創設期→	安定期→	転換期 →	収束期
7月19日	7月26日	7月31日	8月6日
混乱→	落ち着き→	収束準備→ チラシ配り→	残ニーズの解決 市社協への移管
初動的ニーズ	二次的ニーズ	→	→
被災地全般	対象者の絞り込み (再依頼内容の吟味)	福祉的対応強化	

※ボランティア活動者は週末に増加、ボランティアの依頼は、週末に減少した。

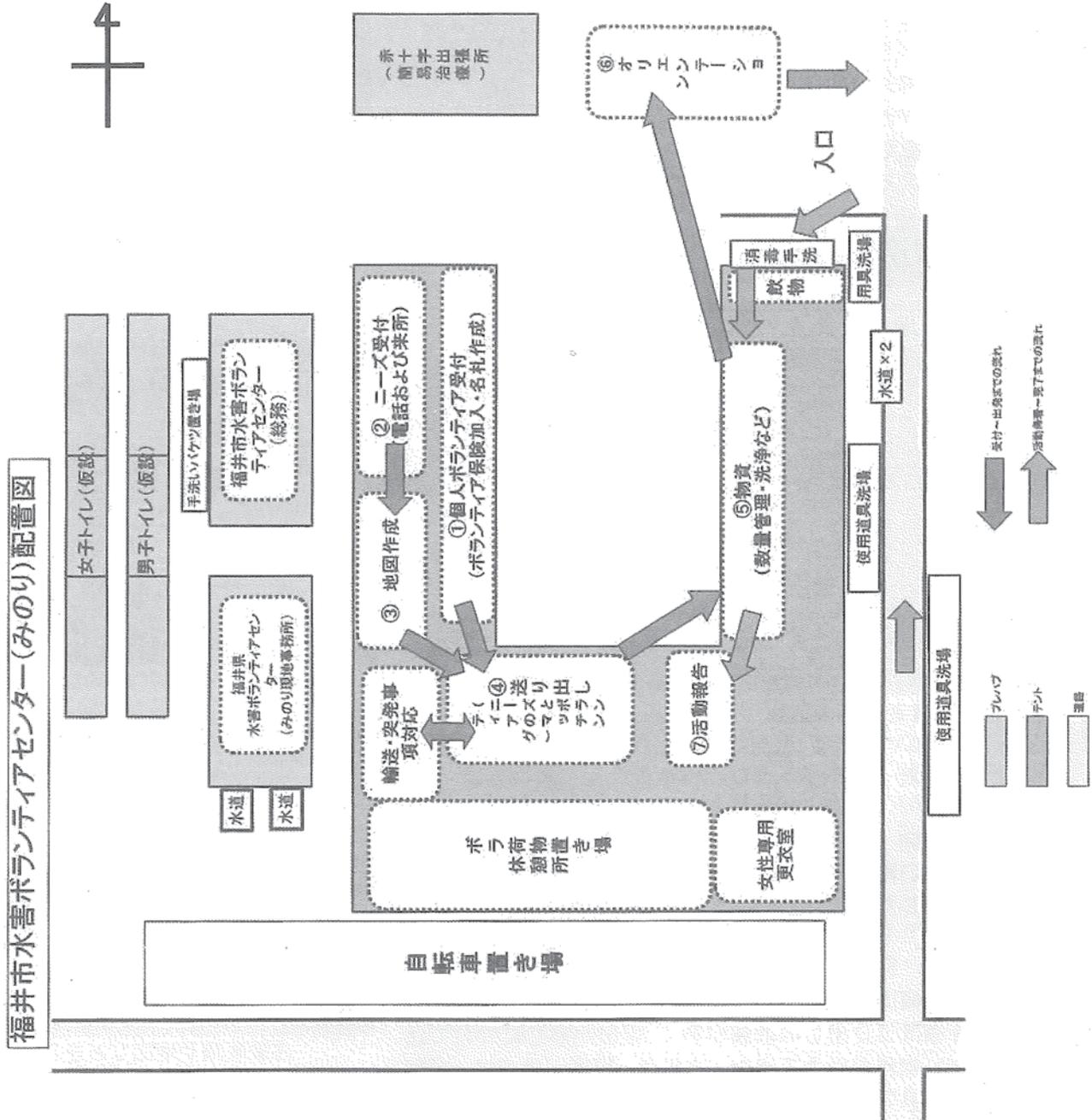
○設置から閉鎖までのトラブル・課題

	みのり(個人単位の依頼)	一乗(自治会単位の依頼)
設置時	<ul style="list-style-type: none"> 行政との連携が不十分であった(発災当初は市役所でも受付) ボランティア活動へのニーズが読めない(的確な被災状況の把握) ボランティア活動受付帳票類等が不十分であった 	<ul style="list-style-type: none"> 現地災害対策本部との連携が不十分であった(情報伝達、資材の調達) 交通規制が不徹底であった(一般車両進入禁止) 保険未加入での活動があった(VC設置前・自治会対応分)
設置期間中	<ul style="list-style-type: none"> 行政の取り組み情報が十分に伝わらない(避難所の状況、資材の手配等) 偽ボランティアも現れた(寝食めあて、指導したがる人など) 	<ul style="list-style-type: none"> 危険な作業依頼への対応の判断に迷った(河川内、山肌) シャトルバスの運行がスムーズではなかった(帰りに乗り切れない状態)
設置終盤	<ul style="list-style-type: none"> 収束に向けての状況把握、住民へのスピーディーな周知が求められた(チラシ配り) 	<ul style="list-style-type: none"> 自治会(長)との連携が大きな力となった

(9) VC運営に使用した物

賃借	プレハブ、テント、机、コピー機、電話代、インターネット代、レンタカー×5台、仮設トイレ×5基、電気代(工事含む)、水道代(工事含む)、案内看板、送迎バスの一部など
新規購入	事務用品、PPC紙、各資機材、衛生用品、飲料水、土嚢袋など
協力物品	Tシャツ、作業用ズボン、軍手、マスク、飲料水、土嚢袋など
企業協力	自動車×数台、カラーコーン
通常のものを持込	ノートパソコン、プリンター、ルーター

センターレイアウト



福島市水害ボランティアセンター(みのり)配置図



みのり地区に設置したV C



一乗地区のサテライトセンター

いろいろなボランティア

(1) 全国からやってきたボランティア

- ・自立が進んだボランティア
- ・ホームレスなどの怪しいボランティア
- ・この夏の観光スポット「そば打ち体験」ならぬ「泥だし体験」
- ・出会い・交流→発見→感謝されることへの喜び

(2) ボランティアからの提言

- ・復旧作業時に、被災した世帯の子どもや高齢者、障害者を一時的に預かってもらえる場所の確保が必要である。



カンパを集めるスタッフ

依頼内容の実態

◎みのり・木田地区センター（都市部）

①依頼者の傾向

依頼者の6割は高齢者・障害者の世帯。高齢者・障害者の世帯ほど再依頼率が高い。また、「代理人からの依頼」の割合が高い。代理人の多くは、在宅介護支援センターや民生委員であり、ともに地域レベルで住民の生活状況を把握しており情報が集中する機関である。

同世帯からVCへの円滑な申込体制、円滑な派遣体制を確立するには、これらの機関と有効に連携を図れるかどうかがかギである。

②受付日の傾向

高齢者・障害者からの依頼が一般世帯よりも遅く届いている。また、現地のVC閉鎖（8月5日）後の依頼はすべて高齢者・障害者世帯だった。

③居住地の傾向

高齢者の多い町内ほど高齢者からの依頼の割合が高い。地域の状況に応じた日頃からの支えあい・見守り体制の強化が必要である。

④依頼内容の傾向

初期のうちはゴミ出しの依頼が多く、復旧が進むにつれて急を要しない依頼が増えてきた。高齢者・障害者世帯は、掃除や整頓（家具のなど）の割合が高い。

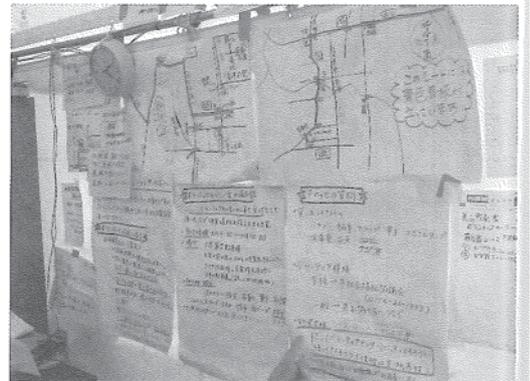
⑤水害がきっかけで生活が変わった高齢者

木田、みのり地区（被災約3,000世帯／高齢者約4,500人／一人暮らし約250人）を担当している在宅介護支援センターの調べた結果

自宅をあきらめ、転居した方	21名
介護保険申請につながった方	11名
病院への入院となった方	19名
高齢者福祉施設等へ入った方	6名
高齢者福祉施設等の利用を検討している方	1名



みのりVCの内部



注意事項や地図などを掲示



駆けつけた高校球児 暑さには強い！

⑥こんなことも

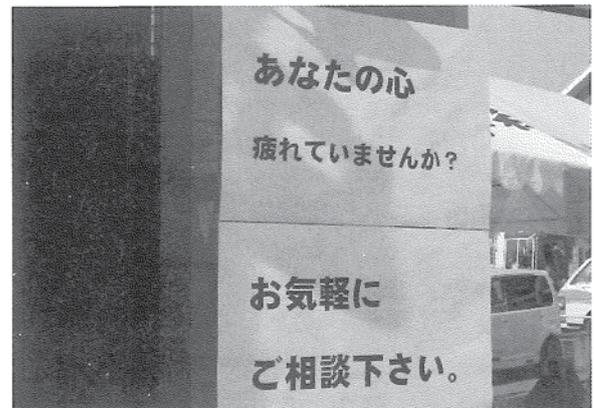
- ・「ボランティア」と称する不審者
災害の混乱に乗じて、「ボランティア」の名を語って家に上がりこむ悪徳業者などが存在した。
VCへ苦情、疑いの電話があった。
- ・床下に泥がたまっているけども・・・
少ない収入の中での補修経費に不安を持つ高齢者は多く、床をめくることをためらって、床下に積もった泥の処理を我慢する高齢者も多かった。

⑦被災地での子どもたちの環境

学校のプール	ろ過装置の故障、散水車の取水口→今夏の使用は不可能
近くの公園	急きよ、災害粗大ごみ置き場に →ゴミ撤去後は、遊具は壊れ、ガラスの破片、油汚れが残ったまま
地域全般	なんとなく騒々しい地域・・・静かな住宅地にいろいろな人が出入り→ 遊べる雰囲気ゼロ

⑧こころのケア

- ・VCから送り出すボランティアにこころのケアの相談窓口やゴミ出しのルールを明記したチラシを配布した。(7月26日から)
- ・保健師・看護師が被災地区を全戸訪問し、各家庭の健康状況を確認するとともに、VCの再PRも図った。(8月1日から)



◎一乗地区センター（農村）

(1) 発災からVCができるまで

被害が発生した当日は、電話も電気も通じず、現地との連絡も取れなかった。また一乗への幹線道路は、緊急車両や重機優先の通行規制が敷かれていた。このような中、どこからともなくボランティアが入ってきて、やむを得ず自治会長が対応した。しかし、被災地に余分な負担をかけるような無秩序駐車による道路渋滞、ボランティア保険無加入などの問題を引き起こしていた。

(2) キーパーソンは、「自治会長」

みのり地区にVCの設置後に、一乗地区自治会長との協議によって、一乗サテライト（VC）を設置した。これ以降、閉鎖までVCと自治会長とで毎晩ミーティングを持ちながら、翌日のボランティアの配置計画を立てて、ボランティアの受け入れの円滑化・効率化を図った。

重機による復旧計画もボランティアの配置もすべて「自治会長」とVCが連絡調整を図りながら実施した。



被害の大きかった一乗地区浄教寺



浄教寺の集落センターが集落の災対本部に

今後の課題

■災害VC運営関連

① VC運営上の課題

- ・ボランティアスタッフ間の「協調」→命令ではなく、ともに考え明日につなげていく
- ・正確なニーズを引き出す洞察力 →依頼受付で、現状と違う聞き取りがされている
- ・県外からのボランティアスタッフ →風習・習慣・土地勘が無い スタッフ配置に工夫必要
- ・高いレベルの能力が必要 →全て指示待ちボラになる。事前の研修等が必要

② 要援護者への広報のあり方

VCへの依頼をし慣れない高齢者や障害者世帯には、初動の際にチラシ等の手段で個別に案内することも必要である。

③ ボランティアの活動範囲・種類の明確化

VCにさまざまなニーズが次々に押し寄せてくる中で、ボランティアと行政と業者の役割に境目がなく判断に迷った。マニュアルではなく柔軟に対応できるガイドラインが必要である。

④ 市レベルの災害ボランティア連絡会

(ネットワーク)の形成

県水害ボランティア本部のおかげで、当VCの設置も運営も円滑に進んだが、市レベルでは初めて連携する関係者が多く、ぎこちない動きが多かった。いざというときの体制を確立していくために、市レベルでの「災害ボランティア連絡会」の設置も必要である。

⑤ その他

- ・災害ボランティア研修などで活動者を養成しておくことが重要
- ・県内外のボランティアに対する情報発信の手段を確保しておくことが重要
- ・ボランティアの安全などに対するリスクマネジメントが必要



様々な人が訪れるVC

■被災住民・災害時要援護者関連

① 安否確認と情報開示のあり方

ひとり暮らしとして登録されている高齢者の、安否確認やボランティア依頼は、行政の担当課や在宅介護支援センター、被災していない民生児童委員の活動で比較的スムーズに行えた。また、障害者も団体に加入または、福祉サービスや相談窓口を利用している方は比較的スムーズであった。

しかし、高齢者のみの世帯(高齢者夫婦・高齢者親子)や上記以外の障害者世帯は十分なデータがなく、安否確認に時間を要した。作業に行ったボランティアが発見した事例もあった。非常時の情報開示のあり方について、早急な検討が必要である。

② 継続的な見守りが必要

一般的に、災害後の安否確認は一度行えばOKと思いがちであるが、元気だった方も、日がたつにつれて精神的にも肉体的にも落ち込むことがあった。そういう意味では被災直後だけでなく、VC設置中期・後期、閉鎖後など、継続的な見守りや安否確認が必要である。

③ 情報提供のあり方

障害の種類や状態の違いなどにより、情報の伝達方法などは多様な手段による方法が必要とされる。現状では音声に頼る方法が主体であり、他の手段の確立が必要である。

④ 災害時要援護者の防災のための環境・条件・体制の整備

障害者に接したことがない防災関係者への研修等を実施し、障害の特性の啓蒙・理解促進を図っていくとともに、災害時の地域内での支え合いを強化するため、地域での防災訓練の「ユニバーサルデザイン化」を図り、障害者や高齢者の参加を喚起する必要がある。

感想

「ふりかえり」

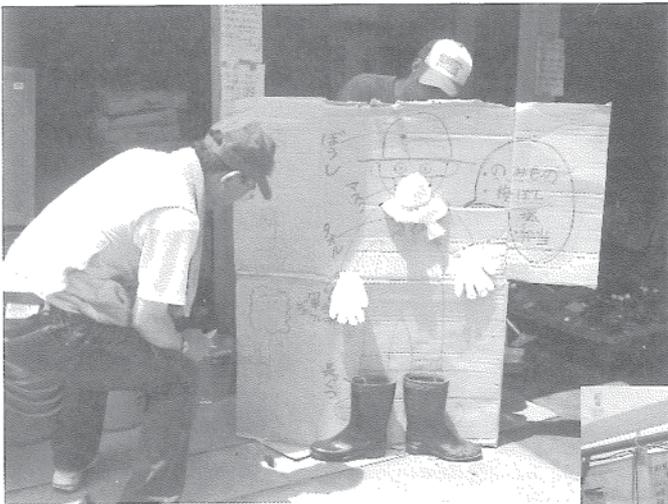
今回の災害対応では、連絡が食い違ったり、情報が正確に届かないといったことに苦労しました。例えば、連絡調整の不足から災害対策本部等との情報共有、物資の融通などの連携が十分に図れませんでした。

また、学校や企業など組織単位のボランティアの場合、到着時間、参加人数、交通手段などが事前にVCへ伝わると当日の人員配置や作業計画を立てやすいのですが、実際はこうした情報が届くことがほとんどありませんでした。学校等の側では活動予定をVCに伝えることの重要性が見えていなかったのです。このため、約束の時間に遅れたり、予定の半分の人数しか集まらなかった学校もあって、作業計画を急ぎょ調整するハプニングもしばしばありました。今後は、こうした災害時のVコーディネートの特徴について、学校等に普及・理解していくことが必要だと痛感しました。

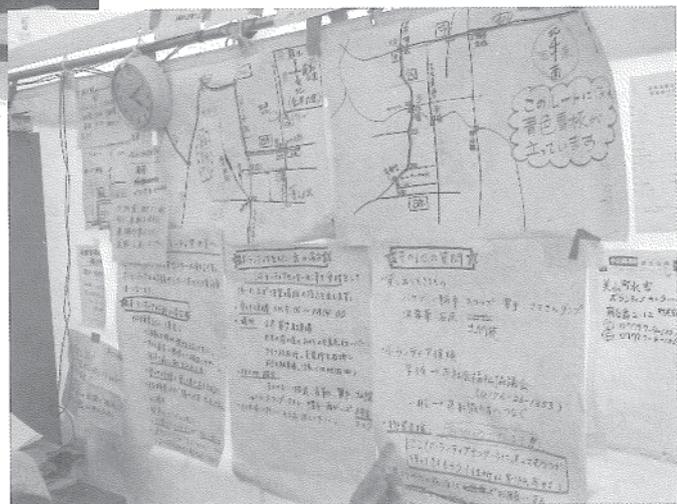
そして、障害者のいる世帯、高齢者のみの世帯（高齢者夫婦・高齢者親子）、災害前に福祉サービスを利用されていない方や当事者団体等に加入されていない方は、安否確認やVCの周知の伝わり方が遅かったため、さらなる配慮が必要と思われます。

今後またこのような災害が起きないことが望ましいことではありますが、「もしも」のために、今後の課題点として、できる限り取り組んで行かなくてはと感じました。

(福井市社会福祉協議会 小柏)



注意事項などを絵にして表示



スタッフのための確認事項や注意点などを表示

美山町水害ボランティアセンター

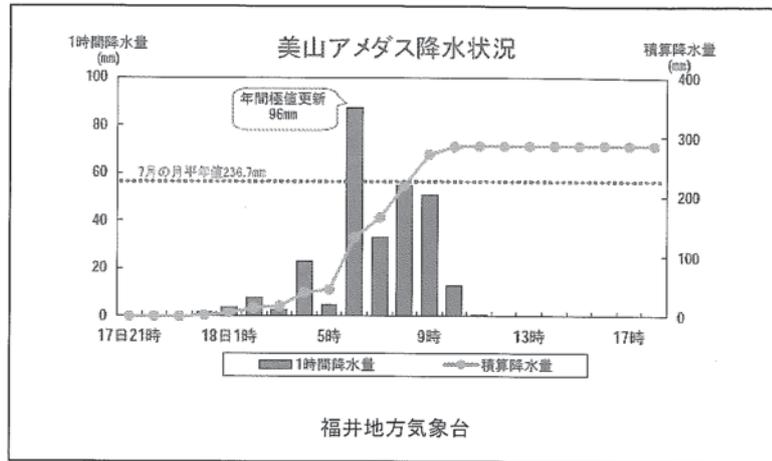


災害の概要

(1) 被災当日（7月18日）の降雨量

積算降水量 285.0 mm

時間最大降水量 88.0 mm/h



(2) 被害状況（単位：世帯）

全壊 36	半壊 38	一部損壊 24	床上浸水 138	床下浸水 175	計 411
-------	-------	---------	----------	----------	-------

※町内（1,405世帯）中、約3分1が被災

※町内6地区中、5地区が被災

※被災後1、2日は、道路寸断などの為遮断された地区2地区

電気、水道はもちろんのこと、携帯電話も不通。被災していない地域も下水処理施設が被災して、上下水道が使用不可の集落多数。

○鉄砲水により男性1名死亡

(3) 避難関係

避難者数のべ : 2,318人
 最大避難者数 : 7/18 1,224人
 最大避難箇所数 : 7/18 27ヶ所 公民館、小学校、役場など
 避難指示・勧告世帯 : 1,100世帯（最大）
 避難指示・勧告人数 : 3,992人（最大）



濁流が集落を襲う



土石で覆われた住宅

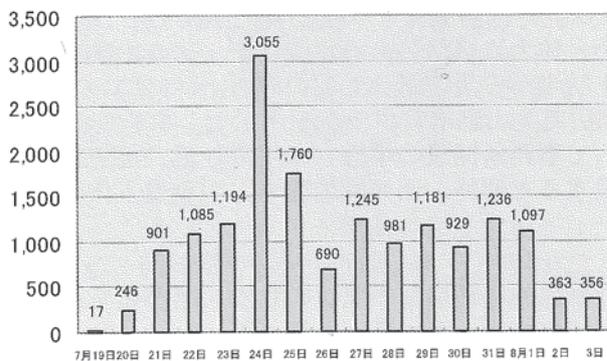
活動の経緯・概要

- (1) 設置場所
 福井県足羽郡美山町朝谷島 2-12
 みやま町民交流館 工作室 (中事務所)
 木ごころ文化ホール前広場 (ボラ受付、配車、資材他)
- (2) 設置期間
 7月20日 (火) ~ 8月5日 (木)
 8月7日~8日社協事務所でボランティア相談受付
- (3) ボランティアの人数等 (約1万7千人)
 1箇所のVCとしては、県内で一番人数が多かった。



泥に埋まっていたみやま町民交流館

美山町水害ボランティア活動者数推移



大勢のボランティアが駆けつけて (VC前の広場)

- (4) 依頼方法と件数
 被災が大きかった蔵作、西河原、東河原、折立の4集落は、集落単位で依頼。
 上記集落は現地案内があり、コーディネートも大口。他は、個人 (世帯) 単位で依頼有り。
 美山中学校へは直接出向くボランティアもあり、美山中にもボランティア受付場所を途中から設置。
- (5) ボランティアの活動内容
 チラシを配布して周知するようにした。家屋内・敷地内の泥出し、掃除など
- (6) スタッフ構成

スタッフ内訳	美山町社協、町役場職員、県社協、高志管内社協、他県内市町村社協、神戸市社協他県外社協、勝山青年会議所、三国・芦原・金津青年会議所、県外NPO、県内学生、同朋大学他県外学生 (帰省学生含む)、県外企業、個人ボランティア (町内、県内、県外)、民生児童委員
スタッフ数	30~50人 (ピストン輸送の運転手等含まず)
VC内の業務	別紙参照

- (7) VC運営に使用した物 (一般ボランティアへの物資以外)

賃借	テント、手洗い流し、洗い場水道仮設、コピー機、電話、インターネット接続、送迎用マイクロバス、軽トラック
新規購入	事務用品 (筆記用具、ステープラ、カッター他) コピー用紙、色用紙、模造紙、案内看板、色ガムテープ、マグネットなど
協力	送迎用マイクロバス、軽トラック、洗浄機、インスタントカメラ
町民交流館備品	机、椅子

ボランティアとボランティアセンターの動き

7月18日(日) <被災当日: V数0>

電気他ライフラインすべて遮断 夜から、携帯も不通

7月19日(月) <V数: 17>

午前: 社協事務所へ(一部職員で社協の外回りの復旧作業)

午後: 携帯がやっとながり、県社協と連絡。

明日からボランティアが入ることを確認。

翌日からボランティア受入することを役場へ連絡。



VCの内部

7月20日(火) <V数: 246>

・朝7時より役場にて受付始める。

・役場周辺の数世帯からのみボランティア依頼が入る。

・道路の復旧優先で被災の大きい下味見地区と、蔵作方面へは、ボランティアを入れないよう行政側から指示有り。

・通信も道路も遮断されている上味見地区への独居高齢者宅など、記憶を頼りに地図に印をつけて、大野市周りで安否確認をボランティアに依頼。上味見地区各集落の状況も見て来てもらう。

・赤谷集落へは、物資を担いでの山登りのため、体力に自信のあるボランティアをお願いした。

・県水害V本部の松森氏達が美山に入り午後1時半から災害ボラセンの立ち上げについて会議。

辻社協会長を本部長に、みやま町民交流館周辺で美山町水害ボランティアセンターを設置決定。

・交流館(交流館も床上浸水で泥だらけ状態)で事務所開設の準備(永平寺社協、上志比社協が協力)

・西河原地区とやっとながりが、VC開設すると連絡。西河原地区も、ボラ受入体制を構築へ。

7月21日(水) <V数: 901>

・JC、社協、NPOなどの応援が入るが、社協以外は初めての顔合わせで、戸惑いも。

・早朝からボランティアが待っている状態、とにかくコーディネートに入る。

・ボラ受付書の様式、初め準備したものから、JCの指示の形式に変更。

・コーディネートの流れが確立できていない状態で千人近いボランティアが入った。

・地元ボランティアが少なく、本部長である社協会長も地図係として現地案内。

・現地へのピストン輸送のバスがなく、やむを得ず、トラックの荷台で搬送。

・被災のためVCは停電状態、電話が4回線繋がっているだけ。昼頃電気復旧、スタッフ一同思わず拍手!!

・午後、神戸市社協から応援が入る。

・夕方、強制ではなく任意で呼びかけたミーティングに20~30人が参加。

この日から毎晩、翌日に向けての熱いミーティングと準備作業が始まった。

7月22日(木) <V数: 1,085>

・交通規制が入ったが、大渋滞。予定していたボラバスが到着しないなどトラブルが発生。

・一時期、ボラ受入中止という情報もどこからか流れ、混乱。

・VCを通さない現地へ直行したボランティアの車や、現地の親戚関係の車などが縦列駐車、さらに交通事情が悪化。VCの責任ではないが、苦情も少なくなかった。

・翌日から、福井駅から無料シャトルバスが出ることになる。

・下宇坂小学校、あいくい亭など、シャトルバスや一般車の駐車場の管理や、そこからの移送なども検討。

・各セクションの動き、人数配分、全体の流れなど再度検討。

7月23日(金) <V数: 1,194>

・被災翌日から猛暑が続き、熱中症になる方も。オリエンテーションで水分、塩分補給を説明。炎天下の作業で、実際はかなりの量の水分補給を必要とした。ボランティアの健康管理徹底に課題が。

・この日朝から、折立に現地コーディネート支援で地元社協職員1名入る(25日までの3日間)。

・午後、VC前広場・駐車場に堆積した泥の撤去作業をボランティアにしてもらう。

・ミーティングで、ボラへの説明文・注意文を渡す意見が出たため、意見をまとめてチラシを作成。

・バス運行管理表作成。県が福井駅と美山町VCの無料シャトルバス運行を開始。

・活動終了ボランティアの迎えに時間がかかっている。勝手に入る個人車や重機等で渋滞のため。

・多くのボランティアが来るであろう週末に向けて、テント位置や受付の仕方など再検討。

7月24日(土) <V数: 3, 055>

- ・続々と到着するバス、ボランティアの波が途絶えることなく、全てのセクションで大混雑。
- ・電話も鳴りっぱなし。十分に対応出来ないことも。
- ・ピストン輸送のマイクロバスも増したが追いつかず
- ・ボランティア、スタッフ共に疲労が。スタッフボランティア募集チラシ作成・印刷。
- ・物資管理表作成。
- ・復旧のため道路が規制されており、スムーズな派遣が課題。(JCより手配)
- ・防災無線が本日より利用可能。公共施設復旧を優先するための行政からの依頼が多い。
- ・次週以降の予想が立たない。(ニーズは増加傾向)



ピストン輸送用のバス

7月25日(日) <V数: 1, 760>

- ・前日の約半分近くになり、全体に上手くマッチング出来た。
- ・VC機能が安定、各セクションで業務マニュアル作成を決定。
- ・立ち上げ期スタッフ(NPO、社協等)が減り、ぎりぎりの数で運営。ボランティアスタッフを募集。
- ・ニーズが変化・多様化してきた。ボランティアの活動範囲の基準が必要。
- ・女性や子どもなど、軽作業に向くボランティアに対するニーズが少なく、活用しきれない。
- ・ボランティア向けシャトルバスは8月1日まで。
- ・公共ゴミの処分について議論。県(行政)担当者もミーティングに参加。

7月26日(月) <V数: 1, 245>

- ・週末に比べ、ボランティアが激減。作業はまだ泥だしが中心。
- ・電話回線を2回線増やし、1回線、ネット専用。ブログ版美山VCのHPアップ(上野市社協協力)。
- ・ボランティア宿泊の協力ホテルや旅館、公衆浴場などの案内を張り出す。
- ・今後の方針として、ボランティア活動は一般家屋を優先とする。
- ・復旧状態の地域差が出てきている。
- ・高齢者の多い地区があり、トイレが共同仮設トイレのため、夜間に困っているという情報が入る。

7月27日(火) <V数: 1, 036>

- ・HP専属のボラスタッフを1名配置。随時情報発信をしてもらう。VC周辺や、現場取材をして、情報を更新してくれて助かる。
- ・ニーズが思ったほど上がってこない。ボランティア過剰、一乗谷へ行ってもらう。
- ・応援の県内社協職員を中心にニーズ調査。「こんなお手伝いをしています」のチラシを配布。
- ・VC全体の流れは、確立してきている。
- ・県V本部が「現地VC代表者等連絡会議」を開催(鯖江にて)。美山からは4名が参加。

7月28日(水) <V数: 848>

- ・小さなスコップなどの需要も出てきた。様々な道具があるため、電話受付スタッフが返答しやすいようにインスタントカメラで各道具を撮影し、名前と一緒に張り出し。
- ・連日、VC受付電話には、直接関係のない様々な住民からの苦情が入ってくる。



土砂と戦うボランティア

7月29日(木) <V数: 1, 181>

- ・台風が週末に接近するとの予報。役場での会議で週末のボラ受入を天候をみながら判断することに。
- ・宮崎からカレーとチャーハンの移動調理車がボラセンに。
- ・地元芦見地区の「芦見に花を植えよう会」の代表と子ども達が、活動に来てくれたボランティアさんに、お礼のひまわりの花を手渡し。
- ・センタースタッフの募集締切り。
- ・夕方から、雷雨。かなり激しい雨となる。

7月30日(金) <V数: 909>

- ・ やっと、折立地区までの道路が一部開通。
- ・ 昨日の雨で地盤が緩んでいると考えられるので、注意を呼びかける。
- ・ 2回目の週末となる明日に向けて、準備。

7月31日(土) <V数: 1,094>

- ・ 台風が近づき、小雨がばらつき、風も強かった。
- ・ 大工、重機オペレーターと小型重機など、専門職の要望が上がってきた。
- ・ 帰るボランティアさんに、簡単なお礼状(A4用紙)を作成して手渡すようにした。



バケツリレーで泥だし

8月1日(日) <V数: 1,097>

- ・ 神戸市社協が日帰りで再度支援(激励)に。
- ・ なぜかボランティア送り出し前後に時間を取られ、待ち時間が少々長くなった。
- ・ 住民とボランティアさんとのトラブル調整に動く。



床板もめくって、床下も

8月2日(月) <V数: 363>

- ・ シャトルバス、8月2、3日も運行となる。
- ・ 夜、最後のスタッフミーティングとなった。

8月3日(火) <V数: 356>

- ・ 快晴の最終日。朝の朝礼をはじめて外で行った。
- ・ ボランティア数が少なくなったこともあり、テント位置など変更縮小して業務を開始した。



急遽、設置した手洗い場

8月4日(水) <V数: 残ったセンタースタッフ十数名>

- ・ 本当にVCを閉めてしまってた良かったのか、嬉しいような寂しいような複雑な思いを抱きながら、まだ土埃がたつVC事務所の掃除をした。

8月5日(木) <V数: 残ったセンタースタッフ十数名>

- ・ 閉所式。
- ・ 美山水害VC開設時は泥の海だったが、ボランティアさんのおかげで見違えるように綺麗になり、タイルの模様も顔を出した木ごころ文化ホール前で、夕方から閉所式を行った。地元のそば打ちの有志数名が、手打ちそばを振舞ってくださった。
- ・ 最後は、全体に若いボランティアスタッフが多く、明るく元気な笑い声が美山の山々に包まれていた。

8月6日(金) <V数: 不明>

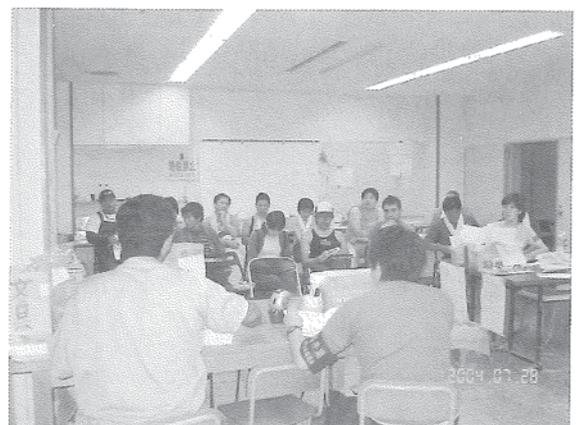
- ・ 最後の後片付け。

8月7日(土) <V数: (2)>

- ・ 社協事務所でボランティアの相談受付。ニーズは無し、ボランティアの問い合わせは数件有り。

8月8日(日) <V数: (2)>

- ・ この日もニーズはなかった。ボランティアしたいという電話は数件有り。



スタッフミーティング

福祉ニーズ

<安否確認やニーズ調査など>

- ① 初期：記憶を頼りに安否確認
 - * 社協事務所へ行くことが出来なかったため、記憶を頼りに地図に印を付け、要援護者の安否確認を応援社協やボランティアの方々に依頼した。
 - * 民児協会長に各民生委員への連絡と安否確認他の依頼をお願いした。
- ② 中期：地図への落とし込みと調査（社協事務所）
 - * 町内の住宅マップをコピーし貼り付けて、巨大マップを作成。
 - * 上野市社協の協力を得て、社協事務所にて電話で安否確認や状態調査。
 - * 地図に付箋で状況等張り込み
 - * 在介ともお互いの情報を出し合い、協力
 - * 神戸市社協から、ポータブルトイレの支援有り（下水処理が使用できない為、各地に仮設トイレが設置されたが、和式でかつ入り口が狭い為、要援護者は使用出来ないことが多かった）
- ③ 中期～後期：歩いて聞き取り（VCスタッフ）
 - * 看護学生を中心に、聞き取り表の様式を作り、各家庭を回ってもらった。
 - * ニーズ調査も兼ねて、応援社協職員が聞き取り。

反省点：本来社協が重点をおいて担うべき福祉面で、医療や保健と上手く連携がとれなかった。また、孤立しがちな高齢者や障害者の方々への支援が十分出来なかった。遠慮や情報不足、また見ず知らずの人には、本音が話せない、ということもあり、本当のニーズがつかみきれなかった様に思う。コミュニティがしっかりしていた所でも、そういった当事者は、地元の人々の数回の声かけで、やっとボランティア要望が上がったとも聞いている。落ち着いてから、何件か当事者宅を訪問したが、辛い思いをしたことを堰を切ったように話す人もあり、日頃顔の見える関係の人々の助け合い支えあいが、緊急時にも生かされるようにしなければいけないと感じた。



安否確認用の掲示ボード

ふりかえって（課題他）

（1）ボランティアセンタースタッフ

みんなで作ったVC～青年会議所（JC）他の力に支えられて

どっと入ってきた、応援社協、JC、NPO、個人ボランティアなど、誰がどの誰ともよくわからないまま始まったVCだったが、初日夜のミーティングの熱い話し合いに、この人達なら大丈夫と確信した。たぶん社協関係者しか残らないだろうと思いながら、「残れる方は残ってミーティングに参加して下さい」と呼びかけたところ、30名くらいがズラッと泥まみれの床に椅子を並べ、入りきれない人は外で立ちながらミーティングに参加してくれた。県外の人も多く、見ず知らずのこの美山の地で、熱心に取り組んでくださる姿に胸が熱くなった。県外NPOや県外の個人ボランティア、団体にVCスタッフとして入ってもらったのは、美山のセンターだけだったらしいが、それぞれがお互いの意見を尊重し、上下関係もなく、自由に意見を発しやすい雰囲気、情報の共有と伝達が出来たことはありがたかった。また、初期は、スキルのあるVCスタッフが多く、土台を作る上で大きな力となった。VCの運営は、管理よりも人をいかに活かすかということが重要だと思われる。聞き役に徹し、スタッフの意見を尊重し、指示するのではなく、みんなで作るという姿勢で臨んだつもりだ。それぞれのセクションで、日々スタッフが入れ替わったが、毎日それぞれ責任者を決め、引継ぎも徹底した。個々の力の結集だが、全く知らない人間の集まりが、短期間でここまで出来るのか、と当事者ながら感心して見ていたこともある。特に、JCの方々は、動きが速く、物資や輸送手配他、精神面でも大きな支援をいただいた。JCなくしては、VCは上手くまわらなかった、と言っても過言ではないだろう。同朋大学の瀧先生他ゼミ生の方々も交替で長期支援をいただいた。社協関係者も連日多数で美山に長期で入っていただき助かった。後半は、地元学生はじめ若いスタッフが多く、過酷ながらも、とても明るい雰囲気でセンター業務が進んだ。

（2）地元の力

集落：コミュニティの力が生かされた

被災が大きかった集落は、それぞれの集落でボランティア受入に配慮をいただいた。リーダー（区長、被災があまり大きくなかった人達など）が中心となって、各世帯のニーズ調査や、現地に入ったボランティアに対する割り振りや指示、ピストン輸送のバスの誘導、情報発信などがあり、スムーズなボランティア活動と派遣の助けとなった。西河原は現地受入のミニVCを公民館前で作った。集落単位で受け入れた集落は、まとまりもよく、復旧作業も順調に進んだが、反面、そうでない集落は、ボランティア派遣にも格差が生じた。いざという時の各集落単位の日頃からの備えと、各人の役割分担、連絡調整などの準備は、平常時から必要と思われる。どこに言えばいいのかわからない、誰に頼めばいいのかわからない、反対に何かしたいがどうやって動けばいいのかわからない、といったジレンマもあったようだ。

被災直後は、避難所などで、50代～60代の世代のお母さんパワーが各地で発揮されたようだ。非常時に慌てず、動じず、生活の知恵を生かし、工夫してライフラインの途絶えた日々を乗り切った。あるものをいかに上手く利用するか、また非常時の結束力も凄かったらしく、若い人達は感心して聞いていたと聞いている。



みんなで知恵を出し合い進化していったVC



様々な人たちに支えられ

(3) 各機関との連携

いざという時のネットワークが形成されていなかったが・・・

資金面、物資面、情報面、… いざという時どのように動くか、何も準備が出来ていなかった。どのように連携していくか、全てが手探りの状態で、行政、各機関、住民の緊急時の（危機管理）のネットワーク、役割分担が明確ではなかった。

要援護者の支援に関しても、各機関の連携が取れると効率的だが、個人情報ということもあり、今後とも検討が必要である。非常時には、情報を開示してもよいかどうかという当事者の同意も含め、誰がどうやって支援するか、検討する必要がある。

(4) 迅速で的確な情報を出す力、聞く力

福井県は情報が遅い、更新されていない、といった声が随分聞かれた。これは、HPの情報のことを主に言われたのではないかと考えられる。美山町社協はHPを持たず、情報発信が出来ない状態だったが、三重の上野市社協の支援でブログ版の水害VC HPで、随時情報を発信していった。

日々ニーズが変化していくので、必要なもの、ボランティア活動の必携品、バスの運行状況、現地状況など最新情報が、県本部や各行政のHPで常に更新され、またボランティア、被災者からの照会に即答えられる体制が整備されているともっと良かった。

**美山町水害ボランティアセンター <http://blog.livedoor.jp/miyamavc/> **

ボランティア活動後も、自分の活動先の現在の状況を心配して、連絡を下さる人がいます。わざわざ県外から手土産を持って、活動先のお宅を訪ねて下さる方がいます。自分も他の町での被災者なのに、台風23号の支援に駆けつけて下さった人がいます。活動先の家に、自分の家の使わない家具を届けて下さった人がいます。・・・この小さな町「美山」に多くの方がつながって下さいました。被災直後、自然の力の脅威に言葉がありませんでした。今は、人の、一人ひとりの力の大きさと温かさに感謝の言葉がみつかりません。

早朝から深夜まで休みなく過酷な日々だったのに、浮かんでくるのは、スタッフの笑顔と元気な声。記録には残せないことの方が多いのですが、本当に色々なことがあったなあ、と感慨深く、思い出しながらまとめの作業をしました。ボランティアの皆さんの一生懸命取り組んで下さる姿に何度も涙が出そうになりました。水害ボランティアセンターの3週間は、様々な所との衝突もあり、精神的にも極限に近い状態でしたが、頼りになるスタッフに支えられ、今思えば、とても楽しい、人生の中でかけがえのない時間をいただけたと、関わってくださったすべての方に「ありがとう！」の気持ちでいっぱいです。（松川奈穂美）



センター解散式 本当にお疲れさまでした
心から、ありがとうございました

さばえ災害ボランティアセンター



災害の概要



豪雨が道路をめぐりあげた



道路が濁流の川に

(1) 被害エリア

市内全地区

人的被害（平成17年3月1日現在、単位：人）

内容	死亡	重傷	軽傷
人数	1	2	11

被害件数（平成17年3月1日現在、単位：件）

内容	床上 浸水 住居	床上 浸水 非住居	床下 浸水	家屋 全壊	家屋 半壊	一部 損壊	倉庫等 の建物 全半壊	断水	停電	崖崩れ
件数	352	90	629	4	44	80	13	157	109	15



民家を土石流が襲った



土台から崩落した集落センター

活動の経緯



市役所での受付風景



集まってきたボランティア

日 付	ボランティアセンター関連	そ の 他
7月18日 (日)	<p>災害対策本部内で、ボランティア担当班長を指名。災害ボランティアの受け入れについて対応を検討 (20:00)</p> <p>市NPO課職員と、鯖江市民活動交流センター理事長とが、ボランティアセンターの設置等について電話で協議 (21:00)</p>	<p>大雨洪水注意報発令 (03:08)</p> <p>大雨洪水警報発令 (05:30)</p> <p>現地対策本部設置 (07:30)</p> <p>災害対策本部設置 (08:00)</p> <p>河和田地区避難勧告 (09:05) 以下の各地区の一部で避難勧告 (神明、中河、片上、北中山)</p> <p>※以下、職員を招集。順次、災害対応にあたる。</p>
7月19日 (祝)	<p>市から区長会連合会に災害ボランティアの派遣を要請。快諾を得る。(08:10)</p> <p>鯖江市民活動交流センター理事長から市にボランティア活動に対する支援の申し出 (11:00)</p> <p>鯖江市民活動交流センターで、NPO理事・鯖江J C・市NPO課職員等による連絡会開催。被害状況の独自調査を開始 (12:00)</p> <p>再度、調査結果を元に連絡会開催。市とNPO・鯖江J C・社協等で協働体制の元、ボランティア受け入れを決定 (17:00)</p> <p>※この間、県水害ボランティア本部からの支援の申し出がある。(ボランティア保険、搬送用バスの費用負担等)</p>	<p>※災害対応続く。</p> <p>独居老人・障害者宅等パトロール開始 (08:25)</p>
7月20日 (火)	<p>市役所ロビーで、災害ボランティア受け入れ開始。市バス・福鉄バス等により、片上・北中山・河和田 (ごく少数のみ中河) の各地区にボランティアを搬送。同時に、ボランティア保険の加入を開始。(08:00)</p>	<p>中河地区対策本部閉鎖。</p>

	<p>区長会ボランティアが活動開始。(09:30)</p> <p>各団体・行政による対策会議を開催。運営方法について協議。以後、8月5日まで連日夜に開催(19:00)</p> <p>※以下、8月5日まで連日受け入れを実施。</p>	
7月22日 (木)	<p>NPO・鯖江JC・社協等が中心となり、「さばえ災害ボランティアセンター」を正式に設置。場所は、市役所1階市民ホール。</p> <p>※片上・北中山地区は、現地災害対策本部(地区公民館)を拠点に、地元区長会等でボランティアを受け入れ。河和田地区においては、被害数・規模とも甚大なため、各町内公民館ごとにわかれ、区長および区長補助につくセンタースタッフがボランティアを受け入れするスタイルが確立。)</p>	
7月25日 (日)	<p>ボランティア受け入れ数が充足したので、当日の受付を半日で終了(12:30)</p> <p>※この前後から、受入数と派遣数とのあいだで調整が必要に。</p> <p>※この日までに、片上・北中山地区へのボランティア派遣を原則的に終了。以後、河和田地区に集中して派遣。</p>	
7月30日 (金)	<p>災害復旧活動も大詰めに入り、この日より3日間、河和田地区区長会と合同で、各町内を対象に総点検作戦を実施。鯖江JCを中心に、各戸を訪問。ニーズの聞き取りを行う。</p>	
8月2日 (月)	<p>河和田コミセン内に、NPO・鯖江JC・社協等が中心となり、河和田ボランティアセンターを開設。ボランティアを現地で直接受付、派遣。</p>	<p>市内に出されていた避難勧告をすべて解除。</p> <p>北中山、片上地区対策本部閉鎖。</p>
8月3日 (水)		<p>義援物資の受け入れを終了。</p>
8月6日 (金)	<p>河和田ボランティアセンター閉鎖。</p>	
8月7日 (土)	<p>社協において、センター業務終了後における、高齢者・障害者世帯を対象としたボランティアあっせんを実施。(～8月12日)</p>	
8月18日 (水)		<p>河和田地区対策本部閉鎖。</p>

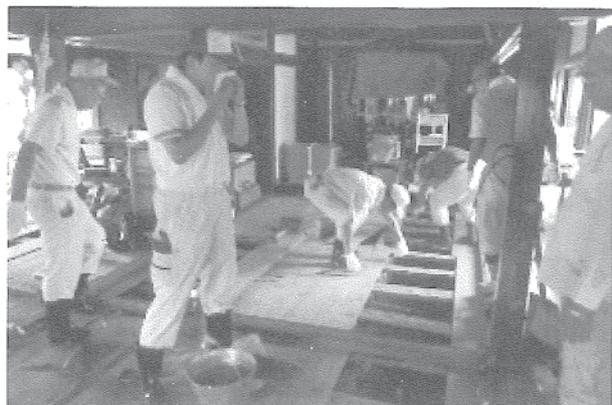
組織に関して



組織・役割分担表

組 織	役 割	主 な 担 当
●本 部 センター長 清水 孝次 (鯖江市民活動交流 センター理事長)	総務・渉外	市、運営会議
	広報（HP、電話対応等）・団体ボラ ンティアの受け入れ調整	市
	センタースタッフの確保・派遣	鯖江市民活動交流センター 同センターの関係団体
	ボランティア受付	鯖江市民活動交流センター 鯖江市福祉ボランティア連絡協議会ほか
	ボランティア保険の加入手続き	鯖江市社会福祉協議会
	ボランティアの搬送	鯖江青年会議所 ほか
	派遣先における区長さん等の補助	鯖江青年会議所 鯖江市民活動交流センター
●河和田ボランティ アセンター (8/2以降) センター長 西野 義孝 (鯖江青年会議所理 事長)	ボランティアのサポート	鯖江青年会議所 鯖江市民活動交流センター エコプラザさばえ
	現地センターの設営・運営	鯖江青年会議所
	センターで必要な物資の提供	市（現地災害対策本部）
	センタースタッフの確保・派遣	鯖江市民活動交流センター 同センターの関係団体
	ボランティアの受付	鯖江市福祉ボランティア連絡協議会
	ボランティア保険の加入手続き	鯖江市社会福祉協議会
	ボランティア派遣世帯のニーズ把握	河和田地区区長会 鯖江青年会議所
ボランティアの搬送	鯖江青年会議所 鯖江市壮年団体連合会	
ボランティアのサポート	鯖江青年会議所 鯖江市民活動交流センター エコプラザさばえ	

※このほか、県や日本青年会議所等の関係機関から、ボランティア保険費用の負担、ボランティア搬送用バスの費用負担、輸送用車両の提供、ボランティア情報の発信、初動時の物資の提供など、多大なる支援を受けました。



床板もめくって



泥出しはかなりの重労働

災害ボランティア数の推移

日付	市内	県内	県外
7月20日	162	82	14
7月21日	416	66	8
7月22日	552	253	30
7月23日	682	513	92
7月24日	848	617	156
7月25日	780	650	435
7月26日	372	346	52
7月27日	175	367	126
7月28日	222	527	123
7月29日	222	174	155
7月30日	197	195	56
7月31日	133	121	127
8月1日	124	161	126
8月2日	52	100	17
8月3日	53	72	79
8月4日	18	55	56
8月5日	21	75	47
8月6日	8	15	27
合計	5037	4389	1726

合計 11,152人



市役所での受付



待機するボランティア



町中が泥だらけに

記録写真



流された車が重なって



流された車が家に



崩落した集落センター



猛暑の中での懸命なボランティア活動



林業由さん

鯖江の林さん(河和田) 総理大臣賞

第二十九回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクール(全国農業協同組合中央会主催)で、鯖江市立河和田小学校五年、林業由さんの作文「心と命をつないだおにぎり」が、内閣総理大臣賞を受賞した。福井豪雨の被災者に、おにぎりを作って届けた体験を生かして描き出している内容で、全国三万五千九百三十七点の応募の中から、最優秀賞に選ばれた。一月二十八日に東京都内で表彰式が行われる。

被災者からの感謝つづる

コンクールは、「ごはんをうとく、小中学生を対象に、中心とした食生活や農業について理解を深めてもらおう」として一九七六年から開催。「最初はとてもしんどいけど、とてもうれ

林さんの住む鯖江市河和田地区は、豪雨の被害がひどかった地域。自宅は被災を免れたが、川から水があふれ、田んぼや家々が泥まみれになった。毎日見慣れた田園風景が一変する衝撃を味わった。床上浸水して公民館に避難した近所の人たちのために、一生懸命おにぎりを作って届けた。おにぎりを作って届けたら、「思っていたより、泥まみれになって運び、感謝されたことを素直に書いた。林さんは「その時のことを、きちんと表現するのが難しかった」と話す。応急作業が息ついた八月上旬、作文を書き始めた。昼間にどう書くかを考えて、夜、寝る前に少ずつ書きつづり、約一週間かけて仕上げた。「思っていたことをちゃんとかけたの

七月十七日、明け方から昼にかけて降り続いた豪雨のため、すごい勢いの水が私達の住む河和田地区をおそいました。水は、川をのみこみ、家のみこみ、家財や車まで押し流していききました。水がひいた後、人々は、何から手をつけてよいか、途方にくれている状態でした。「おにぎりや、おにぎりをできるだけたくさん作って、われ」

私がにぎっていききました。手が熱くてたまりませんでした。が、みんなの事を思うとそんなことは言ってもらえません。お母さんが「そんなにうまくにぎらなくて、公民館まで運びました。道はどろがっぱいで、何度も足をとられすべりそうになりました。どうまみれになりながらやっと公民館までおにぎりを運ぶことが出来ました。」

んでいる時、「昼のおにぎりおいしかったよ。ありがと」と、泥出しをしている人々に声をかけられて、本当にうれしくなりました。夜になり、私達もくたくたでした。昼作ったおにぎりにおしよゆをつけて焼きおにぎりになりました。きつね色になったおにぎりが、とてもおいしかったです。

受賞作品

心と命をつないだおにぎり

公民館から戻ったお父さんが、あわてた声で私達に言いました。多くの家が床上しん水で、部屋や台所に水がきました。朝早くに水がきたので、たくさんの方がなにも食べていないのです。私達はお

いしそくにたき上がったお米をすしおけにうつしました。おかあさんが、ゆかりをすはやくまぜました。私は、ラップをちよつとよい大きさに、何枚も何枚も切つて、テーブルの上に並べました。お母さんがラップに、ごはんをのせ、

とかたくなるからだそうです。私は、少しでもみんなの役に立ちたい、元気を出してほしいという気持ちをかこめてにぎりました。わかめとゆかりの二種類のおにぎりを作りました。作ったおにぎりはもうびたに入れ

が「ありがと。助かります」と言ってくれました。私の家は少しのどろですんだので、少しでもみんなの役に立てうれしかったです。その日は、夜まで何度も何度もたき出しを続けました。おにぎりを運

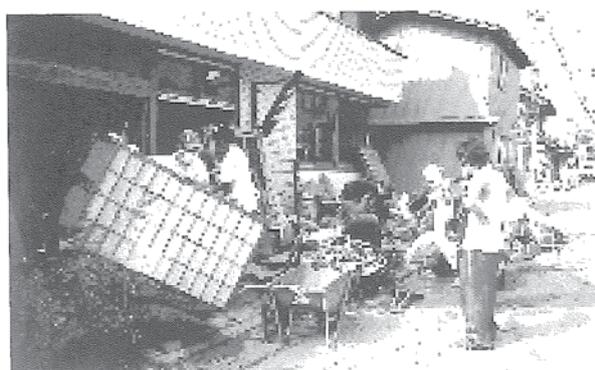
な。簡単に出来て、食べやすくなる元気がパワーをあけることが出来るのだからと心から思いました。にぎった人の気持ちがいっぱいだったおにぎりは、きつとみんなに生きる力をくれたと思います。

活動した人の感想

水害復旧の際、私の行った仕事は、ボランティアの方々の受付業務などでした。いきなり訪れた緊急事態に、最初は右往左往の対応。暑い中駆けつけて来られたボランティアの方をがっかりさせてしまった出来事が多々ありました。「これではいけない！」昨日うまくいかなかった点を、今日は工夫する、また、他水害地域のボランティアセンターの対応に学ぶ・・・の繰り返しで、少しずつカタチを作っていました。ボランティアセンターでの受付業務は、「力になりたい」という気持ちと「手伝って欲しい」という気持ちの橋渡し業務だったと思います。「両方の気持ちがキチンと重なりあうことで、災害の地に笑顔が咲く。そこから明日の復旧の力が沸いてくる」このことは、業務を通じて痛感したことです。(30代・女性スタッフ)

鯖江市とNPOをはじめとする福祉団体、JC等が協力した今回のボランティア体制は、今後の災害対策の大きな礎になったと思う。(30代・男性リーダー)

大きな災害が起こったときは、市役所・市民・NPO等の区別も関係ない(市役所も、もともとは市民のものだから)。民間がやったとか、行政がやったとか、協働のルールとかの話は、あとでついてまわる話であって、その当時は、「できるものができることを行う」という考え方で乗り切ってきた。その点では今回、鯖江市では、多くの地元市民団体と行政、地区住民が手を握り、様々な試行錯誤を繰り返しながらも、センターを運営することができたのは、大きな一歩であると思う。その結果、災害後、市民の声の高まりを受けて、いち早く「災害ボランティア連絡会」を立ち上げることができた。日頃から地に足の着いた活動をしていない防災関係団体や、「これが正しい」と決めつける机上のマニュアルが、現場で役に立った例は少ない。今後は、連絡会の活動等を通じ、普通の市民団体、普通の市民が、毎日の生活の延長のなかで、地道な努力を重ねていくことが大事だと考えている(40代・男性リーダー)

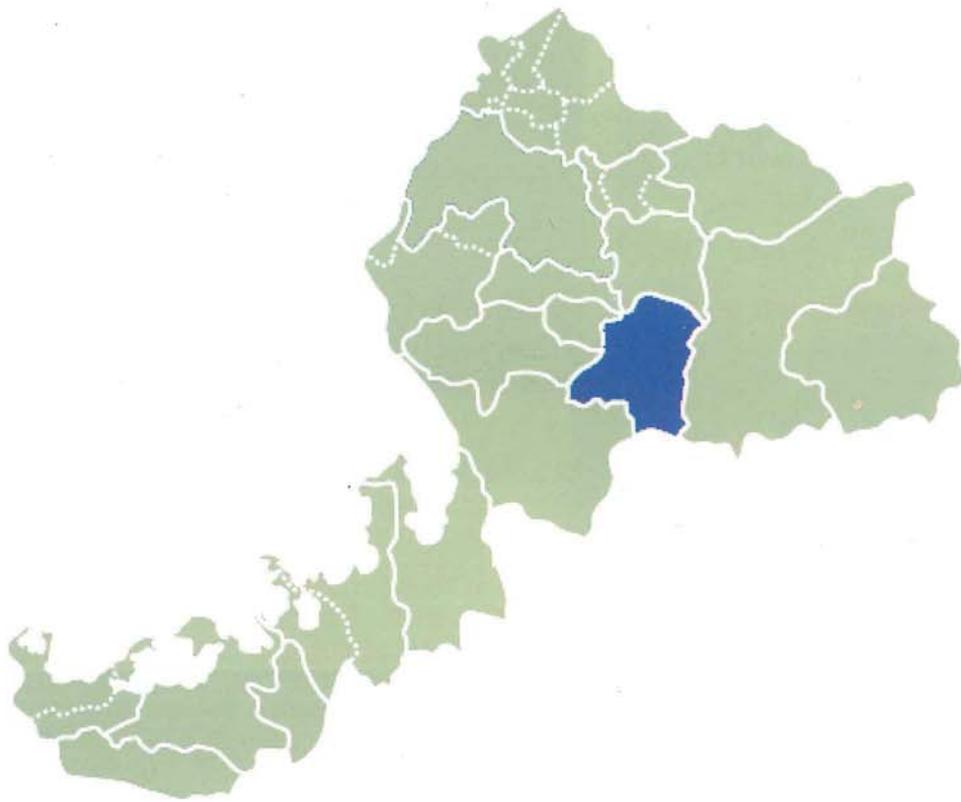


運び出されるゴミ



地域で協力してゴミを搬出

池田町水害ボランティアセンター



被害の概要

豪雨の記録

7月18日早朝、新潟で猛威を振るった梅雨前線が南下、雷を伴った叩きつける様な豪雨が池田町を襲いました。最大の時間雨量は、災害の危険性があるとされる降雨量の85mmを記録し、下池田地区を中心に町内各地に被害がでました。その被害総額は60億4700万円にのぼりました。

被害エリア

旧下池田地区

(上小畑・下小畑・千代谷・金見谷・大本) が主に被害を受けた



道路が削られて（小畑）

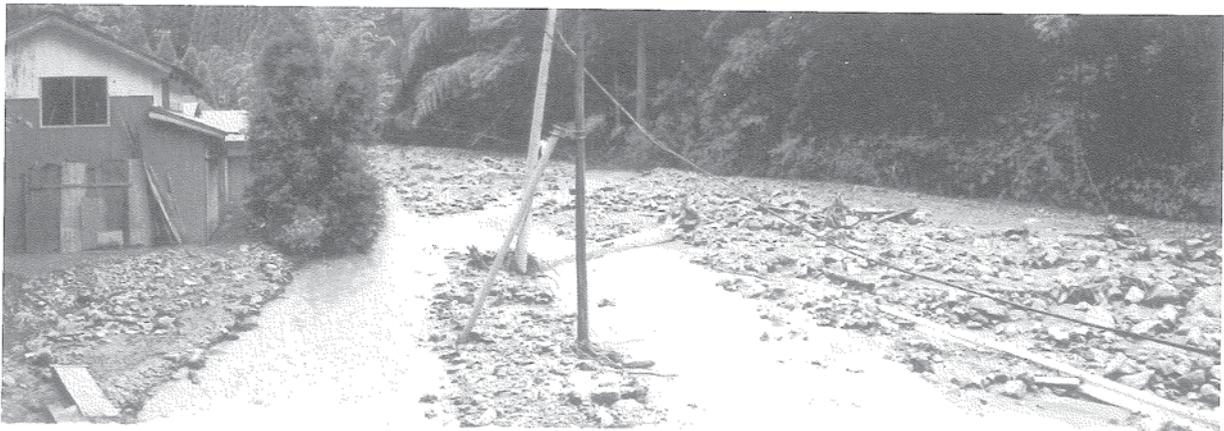


濁流にのまれる大本

人的被害 なし

被害件数

全壊	…	4棟
半壊	…	13棟
一部破損	…	1棟
床上浸水	…	23棟
床下浸水	…	103棟



土砂が堆積し、川と道路の区別がつかなくなっています
電柱からガードレールまでが道路で、そこから山際までが本来の川でした

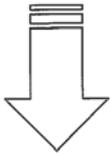
活動の経緯

◆7月19日(月)

夜、防災無線によりボランティア募集

◆7月20日(火)

- 朝～社協が中心となり、老人福祉センター内にて、ボランティア受付開始。
 - ・ 被災地(持越地区)へボランティア送迎
 - ・ 炊き出し準備ボランティア受け入れ
- 夕方～老人福祉センター及び町開発センターを避難所とし避難者の受け入れ対応



- ・ 被災地の復旧ボランティア受け入れ
- ・ 避難所のボランティア受け入れ

◆7月24(土) 25日(日)

・土日の二日間を町(災害対策本部)と協議し、
集中的に旧下池田地区へボランティア投入(受
付場所を交流会館前に変更)

※27日(火)まで受け入れ

◆7月28日(水)

これ以降は町の関連先(サミット関係)を受け入れ



センターからマイクロバスで出発



ここは元は川だったので
すが、土石流で埋まって
しまい、道路のようにな
っていました。

組織とセンター配置

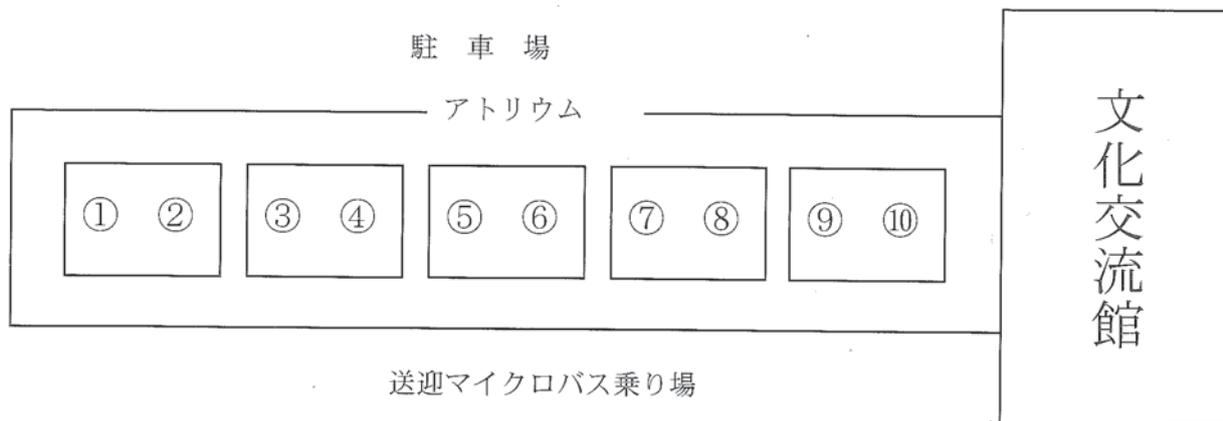
組織に関して

- 被害地 5地区に対し町職員を配置（責任者1名）
- ボランティア受付等対応については社協、教育委員会、教員が担当
- 資材、衛生等は町職員が担当
- 夜の災害対策会議にて各地区責任者より当日のボランティア作業の内容報告及び次の日の要望を聞く
- 社協職員にて次の日の各地区へのボランティア投入予定人員等を検討
事前に聞いているボランティアの各地区への割り振り



災害対策本部会議でもボランティアは重要案件

センター配置図



受付割り振り

- ①・② 地方自治体関係
- ③・④ 企業関係
- ⑤・⑥ 町内集落要請関係
- ⑦・⑧ 当日受付けボランティア
- ⑨・⑩ 登録済ボランティア

ボランティア受け入れ態勢

ボランティア活動計画業務分担

●受付係

社協・教員・役場職員で協力
集落別受付25人毎に送迎バス発車
受付開始は午前7時より

●資材分配係

各区に事前に配布、配置

●人員輸送車

池田観光マイクロバス3台、町マイクロバス1台、
公用車2台を配置

●責任者

各区長と連絡・支部と連絡調整・腕章着用

●衛生係

防疫関係の指示（石灰の散布）

●支部

各区の責任者および本部との連絡調整

●救護係

医療スタッフは支部にて待機し迅速に対応する

●作業時間

8時より5時まで（交流館帰着）とし、午前午後各30分休憩、昼食時は60分の休憩とする。
昼食は本人持参。

●通行規制

親戚スタッフについては、野尻から通行が困難なため、本部許可書持参で松ヶ谷まで通行可能。



避難所で活動するボランティア

ボランティア受入・輸送計画

地区責任者 ・各地区担当者確認のうえ、7時20分役場出発 担当職員同乗

- ・ボランティア受入準備及び人員確認
- ・ボランティア作業内容と各戸人員の割振りを区長と調整
- ・作業進捗状況の確認・衛生状態の監視、状況記録写真
- ・土砂とゴミの搬出崎の指定（住宅地区に必要事項を記入）
- ・終了時には人員数及び持参物を確認し待機

輸送係

- ・輸送車輛の運行管理
- ・原則1時間毎に出発する。但し25名に達し次第出発
- ・資材輸送は軽トラックを使用
- ・計画資材確認後に搬入する
- ・不足資材が発生した場合は地区責任者と協議のうえ搬入

ボランティアの活動内容

被災家屋での活動内容

- 廃棄物と保存物の分類（家主確認）
- 廃棄物の搬出（家主確認の上搬出、指定場所へ廃棄）
- 家屋内の体積土砂の搬出
- 家屋内（床下）の土砂の取り除き後、家屋の洗浄および家財の洗浄
- 家の周りの堆積物の搬出（土砂とゴミとの分類、指定場所へ搬出）
- 家の周りの洗浄

避難所での活動内容

- 炊き出し
- 食事の配膳、片付け
- 避難者の介助
- 物資の仕分け



大活躍した中学生ボランティア



炎天下の中での活動でした



懸命に泥・土砂との格闘するボランティア

活動した人の感想

◎20歳代男性◎

——ボランティア活動、実にハードな一日だった。すくってもすくっても「まだあるんかい！」って量の汚泥。それでも人海戦術と参加者の皆さんのチームワークで、高きハードルを越えた矢先の充実感。人間の暖かい一面を見れた気がして、面倒くさがりの俺でもがんばれた。連日、このような作業をされている皆様には感嘆する。ほんとにいい体験をさせていただき、ありがとうございました。

◎中学生感想文◎

ボランティア活動に参加してみて思ったことは、みんなが一つの思いのもと集まってボランティアをしているんだと思った。はじめ僕は面倒くさいと思っていたけど、現場についた時、啞然となった。それはあまりにもひどく泥が道や溝にたまっていたからだ。その場面を見たら僕はこの場所をきれいにしたいと思った。ボランティアを通して、僕はいろいろなことに感動した。例えば、池田町以外からもボランティアに来ている人が居たことである。災害はひどかったけど、この出来事でいろいろな人がボランティアしようと思ったことが僕はうれしかったです。これからも、いろいろなボランティアをしてあげたいです。(中3男子)

僕は、池田町の災害ボランティア活動に参加しました。池田の被災地を見て大変だなあと、一生懸命復旧活動をしました。全国から参加者が集まっていて、たくさんの方が汗をかいて頑張っているところを見て感動しました。これからは、困っている人を助けられるようになりたいと思います。(高3男子)

ボランティア精神 池田中学校PTA会長 大岩孝一 ※池田町PTA連合会報17・3・1号より

昨年の夏休みは雨に始まり風に終わった年ではなかつただろうか。百数十年に一度あるかどうかと言われている集中大豪雨。真に今まで誰も経験したことの無い大災害と、大自然の驚異を目の当たりにした。罹災された方々も多く大変ご苦労されたと思う。

そんな中、全国版のニュースで「被災地で地味な活動を続ける中学生」と池田中学生のボランティアの様子が報じられた。部活動毎に別に又個々にと何度となく応援活動に出ているとのことで、「我が町の中学生として僕達は当たり前のことをしているだけ」と半分照れ顔でインタビューに答えていた。私自身も数日作業に参加させていただいたが何せ真夏である。とにかく暑い。大き目の水筒2つ用意して行くものの、午前中であってしまふ様な状態。午後は容赦なく照りつける太陽との戦い、黒長靴の中が焼け、汗と混ざって足指がふやけている。自ずと日陰を求めて腰をおろす。しかし、中学生は元気だ。顔まで泥まみれになり黙々と作業に取り組んでいた。頼もしく、一回り大きく感じた。

県内35市町村だったのが今はいくつ？と尋ねてもすぐに答えられない時代。また、直面している少子化問題、学力低下が指摘されている今日、日々生活環境が変化しつつも、人の役に立つというボランティア精神はいつまでも心に残ると思う。今回の災害を通じて池田健児の姿を垣間見た。

あの時を振り返って

座談会

現地VCスタッフ
県V本部スタッフ

現地VCスタッフ座談会

05.03.10 ふくい県民活動センターにて

■参加者

【福井市VC】	小柏博英	福井市社会福祉協議会
【美山町VC】	松川奈穂美	美山町社会福祉協議会
【今立町VC】	児玉 勝	今立町社会福祉協議会
	細川かをり	(特) ふくい災害ボランティアネット
【池田町VC】	辻本悦夫	池田町社会福祉協議会
【鯖江市VC】	西野義孝	鯖江市青年会議所
■オブザーバー	西出裕子	福井県県民社会貢献活動推進協議会 委員
■コーディネーター		
【県本部センター長】	松森和人	(特) ふくい災害ボランティアネット

松森：児玉さん、VCの設置に至った経緯を教えてください。

児玉：発災したときは、召集があって社協の方に詰めていました。研修も受けていたのでVCを立ち上げなければいけないという意識的なものはありました。自覚はしていましたが職員間でも話していたのですが、立ち上げるということを自分が言い出しているものなのか迷っていました。

一旦、家に帰ったら、(18日)夜7時半ごろ立ち上げ決定の連絡が入ってきました。町長から決定したから準備をするように、ということでした。

松森：細川さんはVC設置のために動いていましたよね。

細川：(18日)夕方に社協にお伺いしました。

児玉：面識はなかったのですが、細川さんから設置のやり方はNPO側のスタッフが応援するので、設置の心積りだけはしておくように言われました。

松森：辻本さんはどうでしたか。

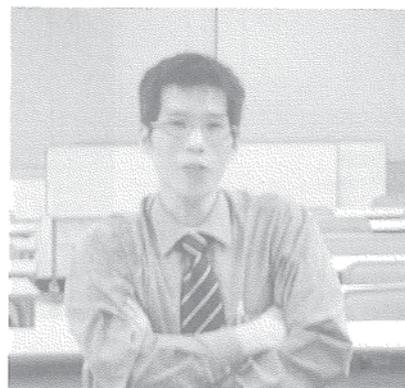
辻本：発災当日の朝、区の自警隊を呼び出して、自分の集落を見て回っていました。役場も、相当混乱していました。自分の集落のこともしなければならぬ。社協の会長も連絡が取れませんでした。

次の日の昼、役場でとにかくボランティア受付を自分でやると宣言しました。誰にも相談なしで、自分でやることにしました。社協独自で受付をして、車も用意し少しでもボランティアを送り込むことにしました。

特に研修は受けていませんでしたが、しなければならぬと思いました。朝、受付票を作って、自分で机を出して、どれだけくるかわからないボランティアに備えました。その日は、あまり多くは来ませんでした。行ける集落のところへ行ってもらいました。通行できずに途中まで行って帰ってくる人もいました。

松森：松川さんはどうでしたか。

松川：(18日)私は能登にいました。家は役場の近くで、夫とか上の子は、役場の3階に避難していて状況を教えてくださいました。息子から携帯で我が家の車が流れている映像が入ってきたとき、「ああもうだめだなあ」と思いました。とり急ぎ、美山の知人とかとも連絡を取り合っていました。頭の隅に、社協は災害が



今立の児玉さん



池田の辻本さん



美山の松川さん

あったときは家族をおいてでも行動しなければならないということがありましたので、すぐに帰ろうと思いましたが、結局、夕方に美山に帰り着きました。とりあえず、社協の事務所に行きました。

翌日の19日、被災していない人と一緒に社協の周りを整理して役場に行きました。局長も来ていました。県社協ともやっと連絡が取れました。その後、誰かにやってくれと言われたからでなく、やらなければならないという気持ちからVCを立ち上げることにしました。局長からも、やるのはいいけど、「お前がやらなければいけないんだぞ」と言われました。

松森：帰ってきて、見た瞬間に腹をくくったのですか。

松川：能登にいる時点で思っていました。仲間と連絡をとり合って相談していました。

松森：西野さんはどうですか。

西野：17、18日はJCの例会の企画で鯖江の駐屯地で自衛隊の訓練に参加していました。その後、新潟豪雨災害の応援に行く予定でした。しかし、雨がひどくなってきてスケジュールが中止になりました。災害の可能性が強くなって自衛隊の動きもあわただしくなっていました。19日午後7時半に、鯖江市役所に行きました。結局、災害対策本部長とVC本部長が兼任するという形で、VCが立ち上がりました。「鯖江市役所が全面的にバックアップする。」と鯖江市が言ってくれました。



鯖江JCの西野さん

松森：小柏さんはどうですか。

小柏：18日午前中に、上司から電話で、福井市も大変なことになっているからと出勤の要請連絡が入りました。職場に行ってVCを作らなくてはならないということも含めて、社協の特性を活かして柔軟に対応しようと思っていました。

松森：何をしなくてはならないかは、重油災害の際の経験値がプラスになっていましたか。

小柏：基本的なノウハウとか、準備しなければならないこととか、後は、人の動かし方とか。7年ぶりに、また、災害VCが始まるのかなと思いました。

松森：細川さんはNPOの立場で災害に関わっていくわけですが、その辺のところをお願いします。



NPOの細川さん

細川：18日は新潟のVCにいて、新潟の支援をしていましたが、福井に帰らなければと思い、予定を繰り上げてかなり早く帰ってきました。しかし、(今立の)4つある谷の奥が次々に被災していて、学校も被災していました。被害は広範囲にわたっており、「やらなければいけない」と思いました。福井も、美山もひどいと聞いていました。鯖江もやられていました。うかうかしていると今立町は地域格差の中でひずみが生まれるのではないかと心配しました。「腹くくってやるしかない」と思いました。しかし、やる必要があるのかどうかを問われたときは、本当に怖かった。

必要がないのに、勝手にやってしまったら後で相当非難されるだろうなと思いました。直接現場を見ないでの判断は非常に不安でした。ですから着いて先ず現地を見に行きました。1つの小学校は、職員が呆然としていました。その後、VC設置に向けて、町との協議も町長に事前説明されており非常にスムーズにいき、社協・JC・市民という協力体制の組織ができました。

松森：ボランティアセンターを立てる立てないの判断は難しいですね。発災後、ほとんどその日のうちに、VCをやることを決めています。小柏さんはノウハウがあるといっても、その判断は別の次元の問題だと思うけれども、どうですか。

小柏：今回は（足羽川が）決壊したからやらざるを得ませんでした。それに、全ての地区社協から情報が入ってくるのですが、一乗だけが情報が入ってこなかったのが、相当状況が悪いと思っていました。

松川：すごくやりにくかったのは、住民に、社協がVCを立ち上げるという認識がありませんでした。今回初めて被災したので、本当にボランティアが来るのかが不安でした。ニーズはあるのか。親戚等身内で復旧しようとしているのでどこまで手伝えればよいか等。住人そのものに、ボランティアを受け入れる素地がありません。VCはあるけれども、社協がやっていることを今回初めて知った人もいました。

小柏：重油から7年たっているんで、例えばJCの方などは代替わりしています。行政の方もそうです。現在の人達と災害についての話し合いをしたことがありませんでした。

松森：行政との関係で困ったことはありませんでしたか。



コーディネーターの松森さん

松川：VCの役割は来ていただいたボランティアの人に、安全に活動していただいて、気持ちよく帰っていただくことにあると思います。だから、真夏日が続いたので、健康が一番心配でした。しかし、看護師さんの常駐も、ままならなかったのが現状です。また、町の判断は、ボランティアの役割を一般住民の生活エリアの復旧より、公共施設（保育所・学校等）を優先したのではという印象がありました。

児玉：今立の場合、行政は非常にバックアップしてくれていたと思います。

細川：VCが力つけてくると行政とも話しやすくなりました。

児玉：人員的な補充も行政側から協力してもらいました。ただ、金銭的なことは注意するようにしていました。

細川：VCだけで解決できない問題がありました。多分、役場が思っている以上にたくさんあったと思います。VCだけで解決できない問題は、V本部で解決してもらいました。VCは被災者の身近にあるため、災害復旧全般に関してVCへニーズとして入ってきました。

西野：今回の豪雨災害では、トップダウンではなくて、「やらなければならない」とみんなが感じて、まさにボトムアップでできたことが良かったと感じています。最初の4日間は、JCメンバーが、スタッフではなくまさに作業員として活躍していました。資金面でV本部から基金があることを聞き安心しました。また物資の支援なども大変助かりました。地道に作業をしていたことが、大きく影響したようで、いつの間にかVCのスタッフになっていました。

松森：地区によってそれぞれやり方があるので、どのような方法でやるかは地区によって違ってくると思います。今回5つの市町で被災して、美山町と今立町は似ていますが福井市は全く別だし、鯖江市もまた別。池田町も違う。地域色が出るものだなあとつくづく感じました。また、市町村合併が進むことで去年のやり方がそのまま今年通用するわけでないと思います。



福井市の小柏さん

松川：ボランティアを輸送するのも、時間がかかりました。待ってもらっている間に県外の人に、リラックスしてもらうために、福井弁・美山弁講座等を行うなどスタッフも色々と工夫していました。

松森：防災についてはどのように考えていますか。

辻本：災害対策本部立ち上げの基準ができています。町職員の割り振りもできており体制的に強化されています。降雨量によって、VCを立ち上げる基準ができました。ただし、職員がそんなにたくさんいるわけではないので、全域がやられたらパニックになってしまうでしょう。

西野：鯖江市災害ボランティア連絡協議会を1月に立ち上げました。行政に入ってもらって、事務局を社会福祉協議会におきます。何かやらなくてはならないと思っている人間の輪をしっかりと築き上げて、今後起きるかもしれない災害のために準備だけはしておきましょうよという形だけは出来上がったという段階です。

今回の豪雨災害で初めて、県に災害ボランティアセンター連絡会や基金があることを知りました。市も社協も知らなかったと思います。情報の共有化もありますし、ネットワークの問題もあるので、できるだけそういう情報を教えて欲しい。

細川：合併するまでに、旧今立地区として災害ボランティアの組織作りをしておかないといけないと考えています。VCスタッフが少なかったのも、運営にかかわる人材を育てる研修は必要だと感じています。

小柏：新潟中越地震で感じたのですが、ライフラインとか医療関係はすぐに対処がされて動きが早かったのですが、福祉関係は、ヘルパー等が組織だって入れたのが2～3週間後でした。福祉関係者の意識の問題かもしれません。初動期以降の話で言うと、中盤以降は、ニーズが多様化してきます。福祉的支援が必要になることが多かったと思いました。しかし、そこで対応する福祉関係者の人数が十分ではありませんでした。

松川：今回の災害を受けて平成17年度の事業計画の中で体制作りを掲げました。運営委員会の中で議論していきたいと考えています。また、本年度は近県の災害があったときに支援に行く際に使える財源ということで災害ボランティア基金を社協独自で積みました。また、今回のことで住民の皆さんのボランティアに対する意識が高まったと感じています。今後、行政も巻き込んで様々なことを実施したいと考えています。

細川：まず、一般の方のボランティアに対する理解不足、知識不足を解消していく必要があると感じています。次に、行政の発想とボランティア側の発想は違います。お互いにもっと理解を深めていく必要があると

感じています。いろいろな問題を解決していくうえで、VCだけでは無理です。しかし、ボランティアから発信される情報は非常に豊富です。対等に産学官民の連携、コラボレーションがないとだめだと思います。3点目として、行政枠を超えた現地VCがあってもよいと思います。

松川：社協の職員であれば、福祉ニーズに関しては指示を出さなくても、どのような行動をとるべきかの知識は持っている。それ以外に関しても、一般ボランティアと違ってお願いしやすかったです。

松森：どうも長時間ありがとうございました。



座談会風景



記録に残せない話しも

県V本部スタッフ座談会

05.03.14 ふくい県民活動センターにて

■参加者

- | | | |
|------------|-------|------------------------------|
| 【本部長】 | 多田喜代子 | 福井県社会福祉協議会 事務局次長 |
| 【現地運営】 | 樫尾智恵子 | 福井県生活協同組合連合会 理事 |
| 【人材・物資】 | 小川弥仁 | (社)日本青年会議所福井ブロック協議会 副会長 (当時) |
| 【行政関係】 | 永田和子 | 福井県男女参画・県民活動課 参事 (当時) |
| ■オブザーバー | 西出裕子 | 福井県県民社会貢献活動推進協議会 委員 |
| ■特別ゲスト | | |
| 【コーディネーター】 | 細川かをり | (特) ふくい災害ボランティアネット 副理事長 |
| 【総務関係】 | 山口晋司 | 福井県男女参画・県民活動課 主任 |
| ■コーディネーター | | |
| 【センター長】 | 松森和人 | (特) ふくい災害ボランティアネット 理事長 |

松森：まず、組織の枠にとらわれなくて一個人としての感想をお伺いしましょう。

多田：大きな災害だったけれど、福井県民が一丸となって取り組み、各団体の長所を活かして支援できたのは良かったです。今回の被災によって、全年齢の人がボランティアへの関心をもち、必要性を感じる事ができたように思います。個人としては、猛暑の中で毎日しんどかったです。でもコーディネーターの役割は初めてで、いい勉強になりました。

永田：行政から見ても皆の力を勉強できていい経験だったと思います。今回実際にやってみて民間の人との協力の仕方がわかったし、その大切さを実感しました。



県の担当だった永田さん

小川：僕は日曜10時頃、JCの人から連絡を受けて仕事
場である老人ホームに駆けつけました。川が決壊した後、年寄りの方に2階に避難していただきました。阪神大震災から学んで2日分の非常食は蓄えてあったんです。そうそう、松森さんから物資を運ぶトラックはないかと電話があり、仲間に松森さんを紹介しました。物資を担当し、福井のVC立ち上げにも関わり、トラックを運転してくれる人探しもしました。行政の人に柔軟な対応をしてもらって、同じ目的を持って協力できるいいVCだと思いましたよ。本当に、日ごろしていることや人との繋がりが、有事の際の力になっていくんですね。

松森：18日も20日も、被災しているから行けないけど動ける人を紹介してくれると電話で聞いたのに、なぜ20日からずっとテントにいたんです？

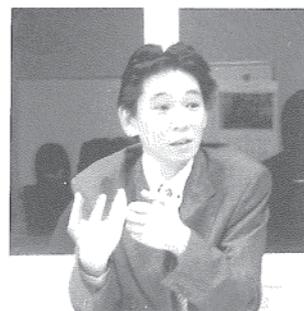
小川：『泥運びだけがボランティアじゃない。誰かがやらないと』と思ったんです。それに現場の情報収集の方が向いてるように思いました。まあ、数だけ把握して指示を出してたので、初めて朝倉や美山に行った時は様々な人に苦勞かけて申し訳ないと思いましたけど。

多田：電話したらすぐに物資出してくれて助かりましたよ。

樫尾：私は地域の子ども会のイベントで三重県にいたんですけど、かかってきた電話で被災を知った後、県の人や上司に連絡を取りました。福井に戻った後、緊急事態の連絡用紙のある事務所に走って、各生協に弁当、飲料の連絡があったらよろしくと電話し、動ける人は動いてくださいとFAXで送付しました。でも通常通り企業活動をしながら被災地の支援もするというのは難しく、なかなかスタッフを派遣できなかったのが悔やまれます。阪神と



本部長を務めた多田さん



JCの小川さん



生協の櫻尾さん

は違いましたからね。そうそう、様々な情報メールが役に立ちました。物資の発注をV本部で一括して出してくれたのも非常に助かりました！

永田：V本部会議は大事でしたね。各現地センターの状況、情報等が把握できて、それが翌日に活かせて。全体的なことについて共通認識を持てたのも良かったです。

松森：アナログだったけど、実際に現地行って掴んだ情報が毎日出てきましたからね。そういえば県V本部は凄く小さな体制でしたね。

櫻尾：ところで、県V本部も現地VCも同じ人が常駐するのが一番だけど、同じ人をずっと派遣するのは難しかったですね。

永田：というか、同じ人だとその人がつらいでしょう。

小川：JCだと仕事の延長線上という形で良かったですけど、普通の人だと・・・。情報を伝えられればいいんですけどね。

永田：VCの壁にいっぱい情報を書いた紙が張ってありましたよ。県も2人ずつは人を投入していたけれど、最初は他の所に回されたりしてました。

多田：市町村社協は派遣しましたよ、できる限り同じ人を。

細川：田中さんも私もボランティア休暇使い果たして有償という形



教員でNPOの細川さん

になったけど、そうならなかったら年休使っていましたね、きっと。パブリックに認めてもらえたおかげで人から責められずにすみませぬ。でも夏休みじゃなければ動けなかったと思います。

櫻尾：生協は個人ごとの仕事なので、止めるわけにはいかないのが辛かったです。でも今思うと、上の方と掛け合えば良かった・・・。

松森：そこ自体の体制がなかったらだめですよ。

櫻尾：災害時に、どこが何をできるか集約しておけば良かったのに。強制力がなくても、企業によっては助けてくれそうですよ。

多田：でも生協が連絡会に入ってたおかげで、物資面で助かりました。

櫻尾：ところでスタッフは何人ぐらい動いていたんですか？

松森：10人ぐらいだったけど、交代要員いなくて誰から倒れるかって感じでした。

櫻尾：ボランティアのHPは、V本部と県庁と各VCで立ち上げてましたよね？本部の情報以外あんまり使えず、人づての情報に頼ってました。

永田：情報専任者がいなくて、現地はデータを発信できなかったんですよ。でも結局、情報錯綜を避けるために情報を一本化したんです。

松森：情報は問題なんですよ。細かく出すか、必要なとこだけ出すか。関心を満たしたいだけの人を相手にする暇はないから。情報は必要最小限でいいんです。文句は沢山来ましたがね。でもボトルネックがいいんですよ。

小川：古い情報がずっとまわっていることがありました。チェーンメールとか。

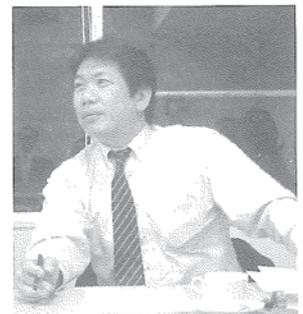
松森：情報の混乱。物資に関しての間違った情報を沢山止めました。『情報をあげないといけない』という強迫観念があるんですよ。でも抑えないと。情報の流れについてもいい勉強になりました。

櫻尾：ほんとに、物資に関する情報は注意しないとイケませんねえ。

松森：次に、お金の件にいきましょう。今回基金の効果は絶大でした。その感想をどうぞ。



久しぶりの顔ぶれです



センター長の松森さん

永田：初めての基金の取り崩しだったので基準に迷いましたね。県民に説明責任があったけど緊急性がありましたし。夜のV本部会議で情報があつたから無駄がなかったと思うけど、最初は心配で不安でした。

小川：無駄のない発注や本部との調整がうまくできて良かったです。それに、被災者とボランティアの人が共に得られるものがあるようにする手助けが大切でした。

多田：本部と現地が一体化してたからできたんじゃないでしょうか。

樫尾：現地VCは助かったでしょうね。阪神の時困ったのはお金だそうです。企業の商品提供は無償か有償か。今回はお金出してくれたおかげで安心して発注できました。

細川：お金や物資に関しては、数予想してV本部への発注を松森さんがしてくれて助かりました。現金は本部が持ってくれたおかげで手間が省けてましたね。物を送ってくれていたから。

松森：被災後の物品購入に関しては？

山口：その日必要なものを発注というコンパクトな買い方を検討すべきと思いました。



松森：地域に合わせた購入ルートの確立か、一括発注か、2種類ありますよね。

山口：年間契約等をして単価を易くする仕組みをとっても良かったのではと言われました。

永田：同じ物が場所ごとに値段違ってたらだめですよ。そういう場合、大きい業者を利用した方がいいんじゃないですか。

細川：今立では、地元で買ったことで感謝されたけど、地元の人から店に行っても物が無いとの苦情が寄せられました。

松森：つまりは、現地のVCの判断次第。でも物資の遣い回しができたから無駄が少なく、京都（の水害）よりも一人頭の金額が安くなりましたよ。それに物品寄附に頼らないVCでいくらかかるのか貴重なデータが得られたと思います。

では最後に一言ずつ、何か今後に向けての意見をどうぞ。

樫尾：企業の社会貢献として、何かあったら声をかけて欲しいし、協力していきたいです。そしてそれが根付くようにしたいですね



小川：今回の経験は貴重でした。災害弱者の点で、福祉に関係することも考えるきっかけになったし、市のはたらきかけを有効利用できるようにしていきたいと思います。

永田：様々な所で手伝いたいし、県としてもいろんな支援や仕組みを作っていきたいです。

多田：各団体が平常時に得意なことが、災害時に活かされると思いました。通れない道があることを初めて知ったので、それを地域の訓練に活かしたいです。災害時の連携の仕方も検証が必要ですね。

西出：関わった個々人の真剣さを感じたと同時に、日ごろの信頼、備えが大事だと思いました。ボランティアをして、気付かなかった力に気付くことができました。



西出さん



記録を取る細川シスターズ？（↑細川由樹さん）

医療ボランティア活動の実際と課題

酒井明子（福井大学医学部看護学科助教授）

<被害状況・地域特性の把握>

今回の災害で、福井県水害ボランティア本部より美山町の孤立集落の住民の健康状態が心配なため、医療ボランティアチームを編成し、早急に健康状態の確認をしてほしいとの要請を受けた。

美山町に入る前日、被災者用の健康状態記録用紙の準備や感染予防を呼びかける 1 枚ものの配布用チラシを作成し、血圧計・聴診器・サチュレーション、貼り紙用画用紙とマジックセットを準備した。美山町役場に到着してからまず実施したことは情報収集である。ボランティアの方や役場健康福祉課の保健師より孤立地区 4 集落 63 戸の住民の医療ニーズが高いという情報を得た。しかし、



徒歩で現地に向かう

実際には具体的な情報はほとんど入ってこないとのことだった。孤立地区はジグソーパズルのように地面が割れ、橋も流され電柱も倒れライフラインは寸断されていた。雨が激しく降っており二次災害の危険性もあった。携帯も使用できず、連絡方法は衛星電話 1 本だった。役場より依頼を受けた住民の米や水や薬を抱え、徒歩で孤立地区の診療所に辿り着き、まず区長から被害状況を聞いた。その後は住民の名簿を受け取り、区長に地区を案内してもらうなどの協力が得られたため、孤立地区住民の健康チェックがスムーズに行えた。40 戸 34 名から聞き取り調査を実施したところ 75 歳以上の高齢者が多く、高血圧・心疾患・糖尿病・肺炎などの既往症を有していた。腰痛・筋肉痛・不眠・疲れの訴えがあり血圧は普段より上昇していた。内服薬を流された方にはかかりつけの医院を聞き連絡をとった。

被害状況を確認するには、水害の発生状況や地理的情報を事前に把握し推測することが必要である。しかし、何より大切なことは、被害状況や地域の特性、地域住民のニーズを保健師やボランティア、地区の責任者の方や住民から直接把握することである。

<連絡方法の確認>

ある孤立地区の安否確認のため筆者は山道を 40 分程度登った。途中の山道は、ほとんど、木や土砂で埋まっており、一部道路が崩れていた。住宅の裏庭は山肌が露出しており、土砂災害の爪あとを残していた。災害当日、地面から突き上げるような揺れがあり、危険を感じ心配だったと話しながらも、やはり、自分の家から離れたくないという思いが強いようで自宅で生活していた。住民の一人が SpO₂ 92~93%にて、肩呼吸見られ、不整脈があった。2~3 日前に風邪を引き、昨日は辛くて寝ていたとのことで、めまい・ふらつき症状もあったため、下山を決定した。しかし、無線機も通信不能となり連絡方法が絶たれた。途中まで下山したところで無線機の使用が可能となり、救急車にて搬送の準備を要請した。連絡方法が絶たれたと知った瞬間、急に自分自身に重い責任がのしかかっていることを感じ身が震えた。連絡手段は十分に確認しておくことが必要である。

<被災者のニーズに応じた対応>

美山町孤立地区の東西をつなぐ橋が流されたため、東西地区間の移動は困難な状況となり救護所は東西に1箇所ずつ必要となった。しかし、救護所が開設されても住民は家屋の片付けで必死になり怪我をしても救護所に来る人は少なかった。災害時には救護班は固定型ではなく、巡回訪問することが重要である。1軒1軒訪問すると自宅家屋の被害状況から生活状況が推測でき、更に気がかりなことを直接確認すると具体的な生活上のニーズが確認できた。「便秘はどうかと聞かれても便が出るほど食事をとっていない」「断水しているので、うがいや手洗いはできない」「入浴ができず臀部が発赤した」「汗疹ができたので川で身体を洗った」「水溜りで服を洗っている」「このような状況で眠れるわけがない」などである。このような生活上の問題が心身の状態を悪化させていた。ほとんどの住民は普段より20~30mmHg程度血圧が高く、不整脈のある人が目立っていた。特に疲労・ストレスが強いため、巡回訪問したときにはゆっくり会話を交わし語る時間が少しでも休息の時間となるように配慮した。

また、水害の場合、家屋の片付けによる手の切創・擦過傷など外傷の方の創傷処置が多い。手袋着用していても、手袋内側に泥が入り込んでいるため、創部がかなり汚染されている。できる限り洗浄消毒し創部感染を防ぐため創部を保護するように創処置をした。その際にはガーゼを薄く当てるなど創処置後もゴム手袋を装着し作業が継続できるような工夫が必要だった。不眠のための睡眠薬や皮膚湿疹のための軟膏、眼脂に対する目薬、疼痛・関節痛のための湿布薬の必要性が高かった。毎日巡回し住民と顔なじみになり、日々の変化を捉えることが大切であり、その積み重ねが信頼関係を築き住民の方から声をかけてもらえるようになった。

<連携・情報の共有>

福井大学医学部看護学科の教員と学生は住民、区長、各病院の医療班、JICA国際協力事業団JMTDR、救急救命士、看護協会看護ボランティア、保健師、全国の災害看護ネットワークのメンバーなど多くの方と共に活動した。活動の際には、活動を開始する朝のミーティングと終了時の申し送りと記録が重要であった。朝のミーティングで全員が住民の状態に関する申し送りを聞き、地図に症状や被害状況や気になる点を書き込み、巡回方法を決定した。住民の健康記録と地図を確認しながら情報交換することで、住民の方の状態の変化がよくわかった。特に地元住民の方の協力が得られ連携し行動できたため、訪問先の住民も安心し、援助者も道に迷うこともなく活動がスムーズに実施できた。



作業終了後の手洗い

<ボランティアへの対応>

福井豪雨時のボランティアは延べ人数は約6万人だった。炎天下での活動であったため、熱中症で搬送されるボランティアへの対応が必要になった。そこで、ボランティアの方への対応として、帽子やマスク着用、水分・塩分の必要性を呼びかけた。ボランティアセンターから塩と梅干を個別包装したものが準備されたが、中でも住民の手作り梅干は好評だった。その他の身体症状としては、腰痛や筋肉痛、目や咽喉の違和感、頭痛、睡眠障害、食欲の低下などが出現していた。

少しでも役に立ちたいと思いボランティアに参加するが、慣れない作業と想像を絶する被害状況と環境条件に疲労が短時間で蓄積していた。一方、住民側もボランティアが協力してくれて

いるので、自分も頑張らなければと考え 1 日中片付けに追われ、ボランティアへの気遣いによる疲れの表情もみられた。ボランティアは災害発生直後から住民と直接的に関わるため、被災者への関わり方として心身の配慮などを含めたボランティアへの事前オリエンテーションは重要である。

<こころのケア>

災害時の心理プロセスには、災害が起こった当初の誰もが必死で走り回る英雄期、被災者同士が協力し外部からも善意の援助が始まるハネムーン期、被災者の忍耐が限界に達し援助の遅れや行政の失策への不満が噴出する幻滅期、被災地に日常が戻りはじめる再建期がある。

災害直後、孤立地区の住民はとても精神的に不安定だった。「大丈夫ですか」の問いに「大丈夫なわけがない。この状態みればわかるやろ」という返答が聞かれた。そして、被災者はお互いに協力し合い、必死で家屋の片付けに追われていた。この時期は水害発生から 1 週間程度の時期であり、いわゆる英雄期、ハネムーン期の段階とかなり一致していた。水害後 10 日目あたりから、仕事に出かける住民の方が多くなってきた。このため、被害に遭った住民と被害に遭っていない住民、床上浸水の方と床下浸水の方など被害状況別によって生活状態に明らかな違いがみられ、お互いに愚痴が出るようになっていた。これは水害発生前の人間関係が影響しており、心の問題や行政への不満となって現れ、今後の生活に直結した問題として表面化するようになり幻滅期に入っていた。子供も成人も高齢者も様々な心の問題を抱えていた。この時期、ビールの缶がとても目に付き、話を聞くと毎日お酒を飲んで寝ないと寝られないという成人の方がいた。時々奇声を発したり、2 階から降りて来られない子供もいた。



体積した土石にできた小川で洗い物を

水害発生 2 ヶ月後、美山町の仮設住宅を訪問した。復興から取り残された住民の不眠状態は続いており、強い疲労感と食欲減退、体重減少、下痢、血圧上昇がみられた。筆者が衝撃的だったのは、「特に災害や被害の漢字が思い出せず、災害と書こうとするとひらがなとカタカナが混じってしまう」という訴えだった。この他、「寝ているといつも水害の光景が目の前に飛び込んでくる」とか、「最近目は覚めると、水害があったのはうそで夢を見ていたんだと思い起き上がる。でもここは仮設だし…と現実であることを理解するのに時間がかかる」と話していた。現実から逃避しながらも何とか心のバランスを保とうと努力している姿がそこにあった。にもかかわらず被災地ではまだ道路には流木がひっかかったままで、道路の工事も長引いている。このように工事が長引くということは工事の音を聞くたびに災害が鮮明によみがえってくるということであり、表面的にも、家屋や道路の早い復興がとても大切である。水害による影響を考えた場合、このように初期から長期的な変化を考える必要がある。そろそろ心の問題が出てきたので、心の相談が必要な時期という判断ではなく、災害直後から心のケアは必要であり、その変化を捉え生活状態と共に細やかな関わりが必要である。

また、水害の起こり方も心理に影響を及ぼす。内水型水害は河川の下流域や海浜地域に多く見られる水害で、水位が徐々に上がり床下や床上を含む水没被害である。この水害は比較的時間がかかり、また、水が引く時間も比較的長時間を要す。警報の発令により被災者は家財道具の搬出や階上の移動のための時間的余裕がもてる。しかし、今回の福井豪雨のような外水型水害は、山間部の土石流やダム の堤防の急な決壊により、一気に大量の土砂や水が襲う状況となる。避難が間に合わず、家財道具

が搬出できず、避難の遅れによる人的被害も起こる可能性が高くなる。このような時間的な余裕の有無や家財道具の搬出ができたか、行動が起せたかどうかということも後々の心の反応に影響していく。

災害による外傷反応は正常な反応であり、徐々に落ち着いていくものである。しかし、きちんと対応しないと、心的外傷ストレス症候群に発展していく可能性がある。通常人は、体験している痛みを遠ざけよう、孤立しようとする。しかし、このように体験を拒否したり、そのことを話さないようにしたり、考えないようにしたりして一時的に体験を否定して考えないようにしても、恐怖や痛みは遅かれ早かれ再燃してきて、自分の行動や人間関係に影響を与えてくる。したがって災害が起こったことで自分を責め、他に何かできたのではと考え込まず、体験したことを他の人に話し痛みや恐怖を取り除くような努力が必要である。災害はいつでもどこで誰にどのような形で起こるかわからない。被害が少なかった人さえも申し訳ないと思ひ罪の意識を感じる場合があるが被害の少なかった人も孤独にならずに話すことである。通常に戻るには時間がかかるため家族や職場などで十分な配慮が必要である。

<感染・食中毒の発生及びまん延への対策>

消毒薬（10%オスバン）の準備および地区への配布は早い時期に行われた。使用方法の説明もちらし配布と避難所への掲示、無線での呼びかけが頻繁になされた。しかし、地区から住民宅への分配がスムーズではなかった。住民宅を1軒1軒回っていると、各家庭ごとに被害状況が異なり、消石灰とオスバンの使用方法、消毒薬の希釈方法などで戸惑いがみられた。その他、環境衛生については、安全な水を供給すること、汚水の処理、ゴミの処理、植物を保護する（食料になる）、個人衛生の促進が重要である。また、救護所ではどんな小さな開放創でも感染の危険性を考え対応した。重大な合併症が起きないように初期治療と管理が重要である。

おわりに

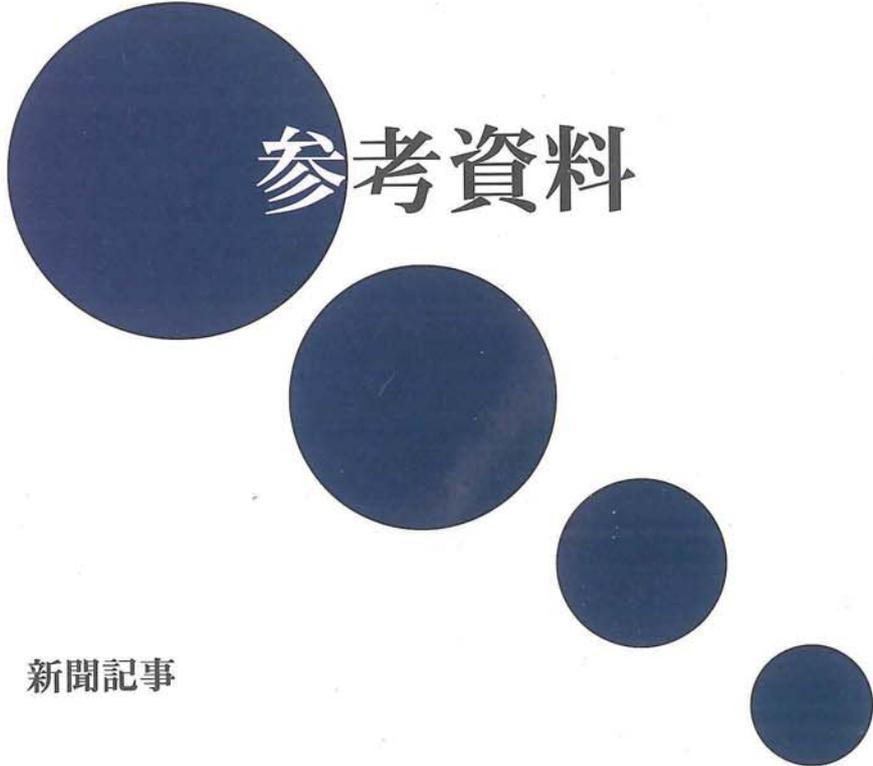
「災害といえば地震というイメージがあり、水害がこれほど大きな影響をもたらしていたとは思わなかった」。これは、学生に水害の授業をしていると毎年聞かれる言葉である。阪神淡路大震災のイメージが強いためだろう。しかし、水害は頻度の高い自然災害である。1990年代のデータをまとめた「世界災害報告2000」によると災害の地域別発生状況、災害による死者数・被災者数ともアジアが群を抜いて高く、発生状況も洪水が31%、風害28%、地震12%であり、水害の発生の多さがわかる。しかも近年の水害は、気象変動によって短時間の集中豪雨となる傾向がある。従って、初期対応をどうするか、住民一人ひとりがどう対応するか、水害に強い社会を作るためにどうするかが問われている。また、水害発生時には、四肢の外傷や感染症への対策が重要である。日頃から災害事例をもとに学習会を実施するなど、災害種類別の対応について検討しておく必要がある。

参考引用文献

- 1) 日本赤十字社：救護班要員マニュアル 11 (1997)
- 2) David,Romo：災害と心のケア アスク・ヒューマン・ケア 14 (1995)
- 3) 酒井明子：東海集中豪雨長期調査 日本災害看護学会誌 Vol.5,No.2,(2003)
- 4) 黒田裕子,酒井明子：災害看護 メディカ出版 (2004)



被災した方の血圧測定



參考資料

新聞記事

「これからのことが大変」「とにかく人手がほしい」「車の修理依頼の電話が鳴りっぱなしだが…」

福井豪雨 一夜明け

暮らして見えぬ泥との闘い

福井北部の豪雨に被害をもたらした豪雨から一夜明けた19日、被災地の住民らは救出や復旧作業に追われ、足羽川の清流が濁り出た。福井市の住居ではその中道流に濁り出した水を近所の人が助けを求めて掃除する姿も。一方、被害が広がった地区では車が田んぼの中へ流されるところの跡がまだ見られるように残っていた。

【福井豪雨取材班】



土砂混れて濁った水田



大雨による水害から二週間、建物の外に出られなかった福井市で、9日午前10時50分

福井市で、被害を受けた建物の一角。土砂が押し寄せた。写真は、福井市で、被害を受けた建物の一角。土砂が押し寄せた。写真は、福井市で、被害を受けた建物の一角。土砂が押し寄せた。



泥だらけになった学校の旧校舎を掃除する

被災した住民らは、復旧作業に追われ、足羽川の清流が濁り出た。福井市の住居ではその中道流に濁り出した水を近所の人が助けを求めて掃除する姿も。一方、被害が広がった地区では車が田んぼの中へ流されるところの跡がまだ見られるように残っていた。

被災した住民らは、復旧作業に追われ、足羽川の清流が濁り出た。福井市の住居ではその中道流に濁り出した水を近所の人が助けを求めて掃除する姿も。一方、被害が広がった地区では車が田んぼの中へ流されるところの跡がまだ見られるように残っていた。

被災した住民らは、復旧作業に追われ、足羽川の清流が濁り出た。福井市の住居ではその中道流に濁り出した水を近所の人が助けを求めて掃除する姿も。一方、被害が広がった地区では車が田んぼの中へ流されるところの跡がまだ見られるように残っていた。

毎日新聞 7/20

願いは一つ「早く家に」

福井豪雨

人海戦術で後片付け

親類、級友、奉仕の人も



福井市で、被災者の多くが、復旧作業に追われ、足羽川の清流が濁り出た。福井市の住居ではその中道流に濁り出した水を近所の人が助けを求めて掃除する姿も。一方、被害が広がった地区では車が田んぼの中へ流されるところの跡がまだ見られるように残っていた。

避難所落ち着かず

住民ら疲労の色

福井市で、被災者の多くが、復旧作業に追われ、足羽川の清流が濁り出た。福井市の住居ではその中道流に濁り出した水を近所の人が助けを求めて掃除する姿も。一方、被害が広がった地区では車が田んぼの中へ流されるところの跡がまだ見られるように残っていた。



県民福井 7/20

「街の色」取り戻そう

県ボランティアセンター始動 福井豪雨

頼りは人海戦術



県内からボランティア等に志願者が集まっている福井市ボランティアセンター。20日午前11時、19日ばかり3日目で（鳥居克樹撮影）

福井市は豪雨で、市内の多くの地区で、土砂や流木が散らばり、交通が寸断された。ボランティアセンターは、20日午前11時から、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアは、ボランティアセンターで、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。

ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。

福井新聞 7/20

県民福井 7/20

2004年(平成16年)7月20日(火曜日)

県内外からボランティア258人

励まし合い



道路を覆った流木を取り除くのに奮闘する市民ら（19日）



ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。

福井新聞 7/21

ボランティア500人突破

今立は充足率19%「まだまだ不足」



土砂や流木の除去作業に奮闘するボランティアたち。20日午前10時ごろ、今立町市野々

豪雨からの復旧に、美山の四町でボランティア200名、本格的に活動。今立「ボランティア」が立ち上がった。しかし、乾燥して、土砂が除去作業に、ボランティアが活躍している。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。

が車を置くようになった場所も、ボランティアたちが、こまめに掃除した後に、コンクリートを取り除くという、二重労働を余儀なくされた。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを開始した。

若い力が大活躍

福井豪雨から5週目を迎えた二十日、福井県美山、今立の四市町の被災地に約四百三十人のボランティアが入り、復旧作業に汗を流した。夏休みに入ったとあり、県内高校生の参加人数は十六校千四百九十一人と前回の四百七十八人から大幅に増えた。被災地を若い力が加え、中学生も美山や東陽町に、百人以上が学校単位で応援に駆け



部員二百五十人が参加し、家族から思わず数千人だ。何か手伝いができれば、同じボランティアは、サと、軽い気持ちで参加。ツカ、部員ら四十一人がしたという西郷祐平君。参加、同日集結センター（二日は、災害現場を自分の前に開かれたボランティア、当分行して、何かし、ボランティアで登録を済まなくては、という気持ち。その後、早速助けが必要になつた。少しでもとす。民家八軒に分かれ、家族がはつとできるよ、て午前八時半から作業に、うな環境に戻したい、と、取り組む。災害当日の、一乗谷川の、だしの行流しなら泥、鉄砲水、住宅十数軒が、。源蔵さんは、福井も年、金華、水が引いた後も、。源蔵さんは、福井も年、河川が変形し住宅数軒、記者が多く力仕事に限、が水没し、二十日、界があつた。ボランティア、大型重機による復旧作、アのおかげで、よやく、業が始まっている。前日、思通しつぎ、この、まで家裏周辺が水没し、息は一をきかけて返して、いな避難者さん、たいと目を凝まして、いの住宅を手伝つた生徒た、。ちば、家の中を埋め、この日は三國高の生徒、くした大量の土砂や流、約百人もボランティア、木などを人海戦術で撤、十ホト力輸出事故、出、建物がゆがみ聞かな、で発けた思慮し、きかた美山、今立と、なうなシャッターを、しよと、美山町と今立、人がかりでこじ開ける、町に駆けつけた。

高校生ボランティア 夏休みで激増

福井豪雨から5週目を迎えた二十日、福井県美山、今立の四市町の被災地に約四百三十人のボランティアが入り、復旧作業に汗を流した。夏休みに入ったとあり、県内高校生の参加人数は十六校千四百九十一人と前回の四百七十八人から大幅に増えた。被災地を若い力が加え、中学生も美山や東陽町に、百人以上が学校単位で応援に駆け

県は福井市、美山町、鯖江市、今立町の各被災地にボランティアを運ぶ無料送迎バスを、二十三日から運行させる。マイカーでの被災地入りは、復旧作業の妨げになることもあり、バスを使うよう呼び掛けている。

【JR福井駅東口発着】
▽福井市みのり二丁目の同市水害ボランティアセンター
一行き▽一乗谷浄教寺地区行き（土日曜のみ県木材市売協同組合経由）▽美山町

ボランティアの足に

ボランティアセンター（下りは午後五時ころから随字坂小、土日曜のみ県木材、時出発する。鯖江市役所と市売協同組合経由）行き、各経由地には駐車場がある。【鯖江市役所発着】同市、河和田地区行き、各ボランティアセンター

県が無料バスをきょうから運行

【JR武生駅発着】今立からは、さらに作業現場に町水害ボランティアセンター に向けて無料バスが出る。問一（今立土木事務所、土日、い合わせは県男女参画・県曜のみ武生東高経由）行き、民活動課 0776（2）行きは午前八時から、帰 070806。

福井新聞 7/23

読売新聞 7/23

福井豪雨から1週間



週末とあって本日のボランティアが福井県に入り、内務の作業作業に汗を流した。24日午後1時ごろ、福井市浄教寺町

広がる支援 被災者に力

美山2集落孤立解消

初の週末ボランティア最多 9413人

福井県内各地でボランティア活動が盛んに行われている。被災者の支援や、被災地の復旧作業に多くの人が参加している。特に、週末にはボランティアの参加人数が大幅に増加している。これは、被災者の生活を支えるため、被災地の復旧作業を進めるため、多くの人がボランティア活動に参加しているためである。

美山2集落孤立解消

美山2集落は、豪雨による被害が深刻で、孤立状態に陥っていた。しかし、ボランティアの協力により、道路の復旧作業が進められ、孤立状態が解消された。これは、被災者の生活に大きな支えとなった。

初の週末ボランティア最多 9413人

今回のボランティア活動は、初の週末開催であり、参加人数が過去最多の9413人を記録した。これは、被災者の支援に多くの人が参加していることを示している。

福井新聞 7/25

ボランティアセンター-終了

18日間ありがとう

福井豪雨

福井豪雨で大きな被害を受け、全国からボランティアを受け入れていた福井、鯖江市の水害ボランティアセンターは五日、復旧のめどがたったとして、受け入れを終了した。美山、今立、池田町と同センターも、三日までに活動を終えており、これでセンターを通じてのボランティア活動は終了した。

県災害対策本部のまとめによると、五日までに県内外から延べ約六万人が駆けつけた。住宅の流れ込んだ泥かきや清掃を手助けするため、豪雨翌日の七月十九日から受け入れが始まり、特に被害が大きかった福井市木田、一乗地区、美山町、鯖江市河和田地区を中心に多くのボランティアが現地入りし、最も多かった二十四日には九千八百六十八人が活動した。気温が30度を超える猛暑と、乾いた泥が粉じんとなって舞う

延べ6万人参加

悪条件が重なったが、ボランティアたちはマスクやゴーグルをつけて被災者とともに懸命に汗を流した。被害が広範囲にわたった福井、鯖江市では活動が続いたが、ようやく復旧の見通しがたったという。

松森和人・県災害ボランティアセンター長は「予想を超える多くの人の温かい心が集まった。被災された方はみな『あり

9.6

がとう」と口をそろえて言ってくださった。活動はこれで一区切りするが、少しは力になることができたのではないかと思う」と話している。

被災者の要望があれば、福井、鯖江市、美山、今立町の各社会福祉協議会が十三日まで、ボランティアを受け付ける。被災者もボランティア希望者も問い合わせは福井市社協(0776・22・0022)、鯖江市社協(0778・51・0091)、美山町社協(07797・6・4842)、今立町社協(0778・43・7834)へ。

社協、13日まで対応



「笑顔のために」

平成16年7月福井豪雨災害 ボランティア活動報告書

編集

特定非営利活動法人

ふくい災害ボランティアネット

〒915-0082 武生市国高1丁目2-1 宇野ビル2F

TEL 0778-21-3966 FAX 0778-21-3966

発行

福井県

男女参画・県民活動課

〒910-8580 福井市大手3丁目17-1

TEL 0776-20-0286 FAX 0776-20-0632

H45/
H
10B

寄贈 福井県